



# 大規模環濠集落

# 八日市地方遺跡の存在意義とは

市制80周年・八日市地方遺跡発見90年記念フォーラム

令和2年

9月13日 (SUN)

会場 サイエンスヒルズこまつ  
小松市こまつの本 (JR小松駅東口正面)

◆特別講演会 13:00 ~ 14:00

八日市地方遺跡から弥生時代を見直す  
—東・西日本を繋ぎ、アジアも見据える—  
石川日出志 (明治大学文学部教授)

◆基調報告 14:00 ~ 14:40

工具の鉄器化と地域社会の変化  
—八日市地方遺跡が開く木工具研究の最前線—  
林 大智 (石川県埋蔵文化財センター)

◆パネルディスカッション 14:50 ~ 16:20

- ・コーディネーター：石川日出志
  - ・パネリスト：林 大智
- 下濱貴子 (小松市埋蔵文化財センター)



主催

小松市埋蔵文化財センター  
〒923-0075 石川県小松市原町ト 77-8  
TEL : 0761-47-5713 FAX : 0761-47-5715

小松市埋蔵文化財センター特別展  
「八日市地方遺跡 90年の歩み」

9/5▶12/6  
開催中



## 開催趣旨

八日市地方遺跡は、昭和5（1930）年、後藤長兵衛氏が八日市地方通称苗代割の水田から2つの石器を発見したことから始まります。

本フォーラムでは、市制80周年及び遺跡発見90年を記念し、北陸随一の遺跡へと成長した八日市地方遺跡の最新成果報告とともに、弥生時代における大陸との関わりから、つねに弥生文化研究の最前線でありつづける八日市地方遺跡の実像を読み解きます。

## フォーラム日程

令和2年9月13日（日）会場：サイエンスヒルズこまつひとつものづくり科学館

13:00～14:00 特別講演会

「八日市地方遺跡から弥生時代を見直す  
—東・西日本を繋ぎ、アジアも見据える—」

石川 日出志（明治大学文学部教授）

14:00～14:40 基調報告

「工具の鉄器化と地域社会の変化  
—八日市地方遺跡が開く木工具研究の最前線—」

林 大智（石川県埋蔵文化財センター）

14:50～16:20 パネルディスカッション

- ・コーディネーター：石川 日出志
- ・パネリスト：林 大智・下濱 貴子（小松市埋蔵文化財センター）

- ・質問用紙はパネルディスカッションが始まる前に回収いたします。発表内容についてご意見・ご質問等ございましたら、ご記入ください。
- ・アンケート用紙はフォーラム終了後に回収いたします。ご協力よろしくお願い申し上げます。

## 目次

開催趣旨・フォーラム日程

目次

講師紹介

### 【Ⅰ 特別講演】

八日市地方遺跡から弥生時代を見直す

—東・西日本を繋ぎ、アジアも見据える—

石川日出志 . . . . . 2

### 【Ⅱ 基調報告】

「工具の鉄器化と地域社会の変化

—八日市地方遺跡が開く木工具研究の最前線—

林 大智 . . . . . 14

### 【Ⅲ 補足資料】

下濱 貴子 . . . . . 24

## 講師紹介

### 石川 日出志 (いしかわ ひでし)

1954年新潟県に生まれる。明治大学大学院文学研究科博士後期課程 中退

現在、明治大学文学部 教授

主著・論文：「卑弥呼時代の北陸」『北陸から見た日本史』洋泉社 2015

『日本発掘！ここまでわかった日本の歴史』朝日選書 2015（共著）

『農耕社会の成立』岩波新書 2010

『「弥生時代」の発見・弥生町遺跡』新泉社 2008

### 林 大智 (はやし だいち)

1973年石川県に生まれる。奈良大学文学部 卒業

現在、公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター 主幹

主著・論文：「木工具から読み解く木製品生産の動態」『古代学研究』第222号 古代学研究会 2019

「北陸における農工具の鉄器化について」『木製品からみた鉄器化の諸問題』シンポジウム記

録10 考古学研究会 2017

### 下濱 貴子 (しもはま たかこ)

1973年愛知県に生まれる。富山大学人文学部 卒業

現在、小松市埋蔵文化財センター 副所長

主著・論文：「北陸の至宝～石川県八日市地方遺跡の出土品～」『重要文化財～出土品が語る

弥生世界～』唐古・鍵考古学ミュージアムリニューアル記念シンポジウム資料集 2018

## 八日市地方遺跡から弥生時代を見直す

—東・西日本を繋ぎ、アジアも見据える—

明治大学文学部  
石川 日出志

### 1. 導入：弥生時代とはどのような時代か

まず、八日市地方遺跡を残した人々が生きた弥生時代とはどのような特色をもつのかを簡潔にお話ししよう（第 1 図）。いくつも上げることができようが、第一に挙げるべきなのは灌漑稲作と米食が始まったことである。数ヘクタールもの水田を造成し、経営するために人々は集まってムラをつくり、地域の中心となるムラの多くは、居住域の周りに濠を巡らした（環濠集落）。モノを切ったりする道具の刃の部分の石で作る石器時代から、鉄の刃を用いる鉄器時代へと移行したのも弥生時代である。稲作を始めたといっても、縄文時代以来の木の実類やシカ・イノシシも食料とした。動物を射止める弓矢の先は打製の石鏃を用いる場合が多いが、そうした打製石器をつくる技術も縄文時代以来の伝統である。水田の造成や経営の中で指導的役割を担う人々が出てきて、やがて社会の階層化が進行した。北部九州の有力者は大陸側の絶大な国家機構とさまざまな交渉を行う者もあらわれた（「漢委奴國王」金印など）。こうして大きく社会変化をとげていき、やがて 7 世紀に国家機構がつくられる歴史の道へと向かう。しかしそれは本州・四国・九州のことであって、北海道や沖縄方面は、のちにアイヌや琉球世界がつくられる道をたどる。弥生時代はその歴史の分岐点ともなった。

### 2. 八日市地方遺跡の威容

現在の JR 小松駅から東側一帯にひろがる八日市地方遺跡は、弥生時代中期（およそ紀元前 4 ～ 1 世紀）の北陸を代表する集落遺跡である。北陸本線と同じ方向に延びる微高地（沿岸洲）上に立地し、それを横断して東から西へと蛇行して流れる河川の南北両側にムラ（居住域）が併存し、その周囲にムラの共同墓地（墓域）が広がる。居住域に濠がめぐる環濠集落で、居住域と墓域の広がり直径 400 m 以上にもおよぶ。発掘調査が広範囲に及んだことで、集落の変遷がかなりつかめる河川の左岸（南側）では、中期前葉に南北 100 m × 東西 150 m ほどだった居住域が中葉～後葉には東西 400 m 近くにまで拡大する。河川の右岸（北側）は未調査区が広いものの、同様の規模であった可能性が高い。今から 2000 年あまり前に約 3 世紀にもわたって、＜小松＞の弥生びとが暮らした。小松弥生びとは、ムラの周囲の低地にムラの面積をしのぐ規模の水田を造成して灌漑稲作を行って生計を立てていた。それだけでなく、特産の碧玉へきぎよくを用いて装身具（管玉）を盛んに製作し、西は山陰～北近畿から北は越後・佐渡・信州の諸地域と交流を重ねた。

弥生時代中期における東日本屈指のムラがここにあったことは、1992（平成 4）年から始まった本格的な発掘調査によってようやく判明したが、それは最近四半世紀あまりのことである。それまでは、八日市地方遺跡の＜実力＞は「期待」はされつつも、具体的なことはほとんどわからなかった。「八日市地方遺跡から弥生時代を見直す」のに先立って、先人の探求の努力の蓄積があったことに触れておきたい。

### 3. 探求の歩み

**遺跡発見** 小松市が、石川県内で金沢市・七尾市に次いで市制施行したのが1940（昭和15）年。八日市地方遺跡の発見はその10年前に遡る。1930（昭和5）年1月と5月に、後藤長兵衛（以下敬称略）が通称苗代割の水田で磨製石斧を2点採集したのが発端で、12・13年には上野与一と後藤長平（長兵衛ご子息）が相次いで小発掘を行った（橋本1970）。

**探求の始まり** 戦後になってすぐに八日市地方遺跡の探求が始まる。考古学の全国学会・日本考古学協会と同じ1948（昭和23）年に石川考古学研究会（以下「石考研」と略記）が設立され、以後年数回の例会が開かれるようになる。翌年12月の例会で八日市地方遺跡の弥生土器の編年が論議されたが結論は得られなかった（橋本1970）。そこで年明けの1950年2月、戦後石川県の考古学を牽引する高堀勝喜氏が後藤氏資料を持参して上京し、明治大学の杉原莊介を訪問した。杉原は「地方色の強い初見の土器」と注目し、石考研が計画する発掘調査に参加の意向を示す（高堀1950）。そして9月に4日間、石考研と杉原の共同調査が実施され、翌々年、杉原が「独特の土器型式」で畿内の「後期櫛目文土器」の影響を強く受けていると学会報告する（杉原1957）。

**「小松式土器」という名称** 現在、私たちは八日市地方遺跡出土土器を基準とする土器型式を「小松式」と呼び、弥生時代中期と扱うが、当初はそうではなかった。例えば杉原の1957年報告は「加賀・小松出土の弥生式土器に就いて」と題し、文中でも「八日市所在の遺跡」としか記していない。地元では「八日市地方遺跡」と呼んでいたが、杉原は1955年の『日本考古学講座』4で「八日市式」という語を用いている。考古学では型式名称は遺跡名を採用するのが原則なので「八日市式」か「八日市地方式」とするのが普通である。調べてみると「小松式」という名称を最初に用いたのは、現在の国立病院機構石川病院の前身である石川診療所の医師で考古学者でもあった中口裕で、『県下の貝塚と古墳』（中口・沼田1957）の中で「小松（八日市地方）」型式と用いた。これを境にしてほとんどの論文・出版物で「小松式」の語が用いられるようになる。1965（昭和40）年の『小松市史（4）』では「小松式土器」という見出しが採用され（上野1965）、1966年に刊行されて考古学を学ぶ日本中の人々に読まれた『日本の考古学』Ⅲ（弥生時代）でも「小松式」が用いられている。私もこの本から弥生時代を学び始めたので、ずっと以前から「小松式」という語が用いられていたのだと思っていた。

**後期から中期へ** 小松式という語が普及しつつあった当時、もうひとつ、これが中期なのか、それとも後期なのかという問題もあった。1957年の学会報告では、畿内第Ⅳ様式の影響を受けたとして、弥生時代後期初頭と扱われた。中口もそれを受けて後期初頭と扱い、多くの人々が、中口説を引用した。ところが、1964（昭和39）年になって近畿の弥生土器研究の牽引者である佐原真が、畿内第Ⅳ様式は中期後半とすべきだとして杉原説を徹底批判したことがきっかけとなって、上記『日本の考古学』Ⅲをはじめ、次第に小松式を中期後半に位置づけることが一般化していく。1961年に石考研が八日市地方遺跡を発掘調査し、この時は後期初頭と扱ったはずだが、1968年に橋本澄夫が報告した際は中期後半とする（橋本1968）。1961年出土土器はほとんど破片だったが、橋本は丁寧に図示して報告し、はじめて小松式土器が理解できるようになった。

**富山・新潟両県で好資料出土** ところが本場の小松式が分かるようになって間もなく、富山・新潟両県で全形が分かる小松式と同種の櫛描文土器群が多数検出・報告されるようになる。富山県では、1968年に高岡市石塚遺跡が調査され、1972年の『富山県史 考古編』に写真と精

緻な実測図が掲載された。新潟県では1977・78年に柏崎市<sup>しもやち</sup>下谷地遺跡が発掘されて、周溝をもつ平地住居5基・掘立柱建物12基以上からなる集落から大量の小松式土器が出土し、碧玉・<sup>りくしよくぎょうかいがん</sup>緑色凝灰岩製の管玉も多数製作されており、その技術も詳細に分かるようになった。石川県内ではようやく1980～85年の羽咋市<sup>よつさき</sup>吉崎・次場<sup>すぼ</sup>遺跡の調査で初めて全形がわかる小松式土器が多数出土した。

**問題解決は八日市地方遺跡しかできない** こうして1970年代になると、小松式土器は能登と富山・新潟両県では資料がまとまるものの、互いに異なる特徴もあって、小松式土器の理解は考古学者間でズレが目立つようになってしまった。こうした問題を解決するには原点から再出発するべきだと考えた増山<sup>ますやまひとし</sup>仁が1989年に発表した論文「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再検討を通して—」（増山1989）は、資料数が少ない制約の中で検討を行い、この遺跡の本格的発掘調査が実施されれば、小松式土器はもちろん、加賀のみならず北陸の弥生文化の形成過程や特色を描き直せるに違いないと、私たちも思うことができるものだった。

そして1992（平成4）年から始まった本格的な発掘調査の成果は、私たちの予想や期待をはるかに超えるものであった。

#### 4. 小松式土器と「小松文化」

**小松式土器** 1970年代まで、小松式土器には、西日本から東海までのいろんな地域の要素が錯綜するとしか判断できなかった（第2図）。杉原は八日市地方遺跡の突帯文<sup>とつたいもん</sup>（12）は西日本弥生前期土器（27）の系譜をひくが、櫛描文は畿内の影響が強いとみた。橋本は、櫛描文手法による直線文と簾状文・波状文を交互に施す（13・14・18・19・24）のは畿内～中国地方に似るし（29 簾状文）、擬流水文<sup>ぎりゅうすいもん</sup>（12・15）は畿内北部、三角列点（14・18）は中国地方（28）、壺の胴が屈曲する（25）のは東海（31）に由来するとみた。甕の口縁端部が上に盛り上がる特徴（16）は、杉原・橋本とも畿内（30）から西日本一帯に類例があるとした。<sup>なかむらごろう</sup>中村五郎は、21～23のような壺の口縁形態は畿内の29の類と関係するとも述べた。しかし横羽状文など説明できない特徴も多かった。

**ハイブリッド土器型式** それが本格的調査で一変する。基本は＜丹後以西＋美濃・尾張・飛騨＞と判明した（第3図）。櫛描文自体、および櫛描きの直線文・波状文などを密に描く複帯構成、その下に点列を添える手法、壺の頸部突帯文は丹後以西から導入されたもの。受口口縁、口縁下の突帯、横羽状文は濃飛<sup>じょうこんもん</sup>の条痕文土器、口縁内面を広く装飾する手法は濃飛<sup>だいち</sup>の大地タイプ土器に由来する。つまり、小松式土器は基本的にはこの2系統の土器デザイン・製作技術から生成された土器型式なのである。その生成は八日市地方ムラで達成されたに違いない。そしてここで完成した小松式土器は、能登・佐渡・越中・越後一帯に一気に分布を広げ、小松式土器・環濠集落<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>・方形周溝墓・管玉製作・広域交流を特色とする小松文化が普及した。小松式土器のように複数系統から新たに生成された土器型式が、その直後に広域に拡散する例を私はハイブリッド土器型式と呼んでいる。

北信濃の栗林式土器も、在来の系統と小松式土器を形成する契機となった丹後以西の土器から生成されたハイブリッド土器型式の代表例である。成立後に関東平野西半部や山梨・静岡両県にも分布を広げるが、北陸側では上越地方から越中・能登・加賀まで、榎田型<sup>えのきだがた</sup>と呼ばれる長野盆地特産の磨製石斧とともに各地の遺跡で点々と発見される。北信濃と小松文化圏との間で濃密な交流があった。しかし、そこにはいまだ北陸では実態がみえないできごとがあった。

**弥生青銅器埋納** 2007年10月、長野県北端の中野市柳沢遺跡<sup>やなぎさわ</sup>で、弥生中期後半の集落の一面から銅鐸<sup>どうたたく</sup>1点・銅戈<sup>どうが</sup>7点が埋納された穴が発見された（第4図）。遺構の約半分は、発掘準備で排水溝を重機で掘削した際に破壊されていたが、その廃土を金属探査した結果、合計銅鐸5点・銅戈8点となった。弥生中期前半から後半までの3型式に及ぶ銅鐸は、畿内周辺のどこかで製作されたものである。一方、銅戈は7点が近畿型という大阪湾沿岸を含む瀬戸内東部で製作されたもの、もう1点は中細形という北部九州製品であった。埋納状況が観察できた範囲では、銅戈6点は刃を立てて置かれ、銅鐸1点は鱗を立てて身を横たえ、銅戈と直交して埋め置かれていた。この埋納法は、出雲の神庭荒神谷遺跡<sup>ひれ</sup>の銅鐸6点・銅矛16点が同時埋納された事例と酷似する。各地の埋納例を見ると、銅鐸も銅矛・銅戈も、多くが身を横にして鱗や刃を立てる同じ埋納法をとる。両者が同時に発見された事例で埋納法を詳しく観察できた事例はこの2遺跡しかないので過剰な解釈は避ける必要があるが、少なくとも柳沢遺跡の青銅器埋納は、イレギュラーなのではなく、近畿周辺から北部九州までの青銅器分布圏の場合と同一の、原則通りの埋納行為を行っていると言えてよい。

それでは、北信濃の人々が、300～500kmも離れた畿内周辺や出雲方面と直接交流・交渉して銅鐸・銅戈を入手し、青銅器を用いる祭儀を行うようになったのであろうか。私は、北陸における小松式土器・栗林式土器・碧玉製管玉・榎田型磨製石斧の動きを追ってみると、小松文化圏、もっと限定すると八日市地方ムラの人々が仲介した可能性は否定できないと考える。

## 5. 西日本、そしてアジアも視野に

**鉄製鉈** 3年前の7月26日、八日市地方遺跡で柄付き鉄製鉈（やりがんな）が発見されたという連絡をいただき驚嘆した。ようやく9月11日に実物資料を詳細に観察する機会を得て、何度もうなってしまった。その原因は、この鉈が鉄製であるにも関わらず、その形態は青銅製品と共通する点にあった。そこから弥生時代の日本列島、さらには朝鮮半島における木工具が、青銅器から鉄器に移行する様子が浮び、さらには弥生時代の青銅器や鉄器の普及はどのように広まったのかなど、芋づる式にさまざまな事柄へと問題が波及すると気付いたからである。

この鉄鉈（第5図）は、鉄製の鉈自体は幅1.9cm・長さ5.1cm（基部側折損）と小さいが、それが、精巧に製作されたイヌガヤ属の芯持ち材の柄に挟み込み、桜皮で巻き固めた優品である。鉈として用いるのは小さすぎるくらいはあるが、円形のグリップエンドと斜格子目を刻んだ帯が彫り出されているので、刃先の制御に問題はない。

この鉄鉈は、身が板状で、両側が平行する直線をなし、両側縁は狭い面をつくる。先端は、左右斜めに直線的な刃が研ぎ出された「圭頭形」となる。通常の鉄鉈が柳葉形の平面形をもつ（第6図右下の南陽里例参照<sup>ナミヤンリ</sup>）のとは異なり、九州で10数点出土例のある青銅製鉈（銅鉈：第5図上右）とそっくりなので、銅鉈の形を鉄で作りに出したとあってよい。

朝鮮半島南部（韓国）では、墓の副葬品として、銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡（多鈕鏡<sup>たちゆうきょう</sup>）・小銅鐸などと一緒に、木工具として銅製・鉄製の斧・鑿<sup>のみ</sup>・鉈の三種セットが組み合わさって発見される（第6図）。日本列島の弥生時代前期末から中期初頭に相当する段階で、鉄製の斧・鑿・鉈が伴う例は一段階新しく考えられている。このうち鉄斧・鉄鑿は中国戦国時代の燕<sup>えん</sup>に由来する鑄造製品で、柄を装着する部位は袋状となっている。

日本列島では、北部九州で銅鉈の実例が10数例あるが、銅斧・銅鑿（銅剣などの再加工品ではなく当初から斧や鑿として製作されたもの）は数例にすぎない。しかし鑄造鉄製袋斧は、破損品が多いものの、九州から関東までかなりの発見例がある。つまり九州の青銅製斧・鑿・

鉈は、これら木工具セットが姿を消すちょうどその段階（＝青銅製木工具から鉄製木工具への過渡期）にわずかに朝鮮半島からもたらされたものである。八日市地方遺跡の柄付き鉄鉈が、通常の柳葉形ではなく圭頭形を呈するのも、木工具が青銅製から鉄製へと移行する段階からそう隔たらない段階であり、伴った土器も弥生時代中期中葉である。

**注目すべき斧柄** この鉄製鉈の発見とともに注目されたのが、木製品の斧柄である。斧刃は見つかっていないが、斧刃装着部をみると鑄造鉄製袋斧用であることは明らかで、13点も確認されている（石川県教委 2019）。小松市教育委員会の調査でも6点発見されており、このうち2点が中期中葉の土器を伴ったと報告されている（福海ほか 2003）が、時期判定を疑問視する意見も出されていた。しかし、このあと詳しい報告があるように、先の県教育委員会の調査でも中期中葉の実例が確認されている。鑄造鉄斧が中期中葉に北陸でもかなり普及していることを認めざるを得ない。むしろ、これまで各地の中期初頭～中葉の鑄造鉄斧の発見例のほとんどが破損品の再加工品であったことや、それに見合う斧柄が確認されていなかったことから、鑄造鉄製木工具の普及を控えめに見る傾向があった。八日市地方遺跡で柄付き鉄鉈と鑄造鉄斧用斧柄が見つかったことは、弥生時代における鉄製木工具の普及に見直しを求めることとなった。

**青銅器の普及も** それだけではない。もう一度、第6図をご覧ください。朝鮮半島で木工具が青銅製から鉄製に移行する段階は、銅剣・銅矛・銅戈・多鈕鏡・小銅鐸といった各種青銅器が多数製作・使用された時期であり、弥生時代前期末～中期初頭の日本列島にそれらもたらされ、多鈕鏡以外は九州でも製作されたことが各種鑄型の出土によって分かっている。朝鮮半島の副葬品セットのうち、鉄製木工具セットの鉄斧と鉈は、中期中葉には八日市地方遺跡のある北陸にまでかなり普及している。それでは朝鮮半島では副葬品セットとなっている青銅器群の普及はどうだったのであろうか。九州では多鈕鏡以外は製作され普及している。問題は九州以東の地域である。

私は、八日市地方遺跡の鉄器関係資料が示すような鉄器の普及と同時に、青銅器も九州に定着した青銅器群が独自の型式を作り出す過程で近畿周辺までそれらがある程度波及したと考える。九州型式の銅剣鑄型が兵庫県尼崎市田能遺跡（中細形A類）で出土し、九州型式から派生した近畿型I式銅戈がおそらくは瀬戸内東部で製作され、九州で形成された菱環鈕式有文小銅鐸から発展した菱環鈕式銅鐸が近畿周辺で製作されたことなどがその根拠となる。

八日市地方遺跡で確認された考古学的事実は、単に北陸を語るだけでなく、西日本の弥生時代を見直し、さらには大陸との関係ももう一度考え直すきっかけを与えてくれる。

私が考古学の道に入った約40年前、東日本の弥生文化は西日本と比べると縄文時代からの伝統が色濃い後進的なものだとか、北陸は櫛描文土器や管玉製作が行われているので西日本の弥生文化の影響を受けているとしても周辺世界にすぎない、などとみられていた。しかし、地元小松市の皆さんが中心となって取り組んできた八日市地方遺跡の発掘調査とその調査成果の検討の積み重ねによって、そうしたかつての弥生時代像はいまや一新されつつあるとあってよい。

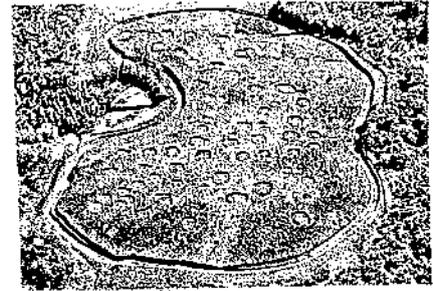
この遺跡の実力のほどはまだまだつかみきれた訳ではない。八日市地方遺跡は、じつに奥深いと思う。

## 参考文献

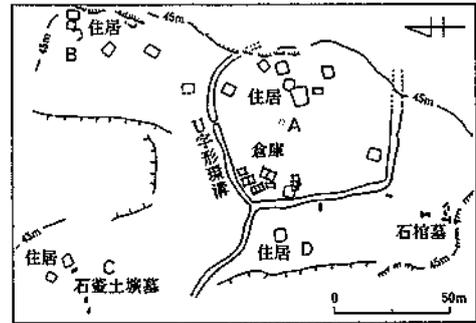
- 安里 進 1990『考古学から見た琉球史』上、ひるぎ社
- 石川県教育委員会 2019『小松市八日市地方遺跡―北陸新幹線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』
- 石川日出志 1992「弥生時代 道具の組合せ」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- 石川日出志 2010「弥生時代青銅工具の稀少性をめぐる諸問題」『釜山大学校考古学科創設 20 周年記念論文集』
- 上野与一 1965「第二篇 考古篇」『小松市史』4（風土・民俗篇）、小松市教育委員会
- 片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
- 小林行雄・杉原荘介 1968『弥生式土器集成 本編』1・2、東京堂書店
- 小林行雄・森本六爾 1938・39『弥生式土器聚成図録』東京考古学会
- 杉原荘介 1957「加賀・小松出土の弥生式土器に就いて」『日本考古学協会第 10 回総会研究発表要旨』
- 高堀勝喜 1950「東京及び信州見学談」『石川考古学研究会会報』第 1 号
- 寺沢薫・知子 1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『考古学論攷』5
- 中口裕・沼田啓太郎 1957「石川県の弥生式文化」『県下の貝塚と古墳』石川県図書館協会
- 野島 永 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』広島大学
- 橋本澄夫 1968「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第 11 号
- 橋本澄夫 1970『石川県考古学便覧』(株)北国出版社
- 広田和穂ほか 2012『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 福海貴子・橋本正博・宮田明ほか 2003『八日市地方遺跡 I』小松市教育委員会
- 本田浩二郎 2016「国宝金印「漢委奴國王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第 25 号
- 松本岩雄・足立克己 1996『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
- 宮腰健司・佐藤 浩 1989「朝日遺跡出土の動物遺存体」『愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和 63 年度
- (ハンゲル)
- 李健茂・徐聲勳 1988『咸平草浦里遺蹟』国立光州博物館
- 李健茂 1990「夫餘合松里遺蹟出土一括遺物」『考古学誌』2
- 池健吉 1990「長水南陽里出土青銅器・鉄器一括遺物」『考古学誌』2
- 李健茂 1991「唐津素素里出土一括遺物」『考古学誌』3
- 韓国国立中央博物館 1992『韓国の青銅器文化』
- 尹亨準 2009『木棺墓文化の展開と三韓前期社会』釜山大学校大学院修士学位論文



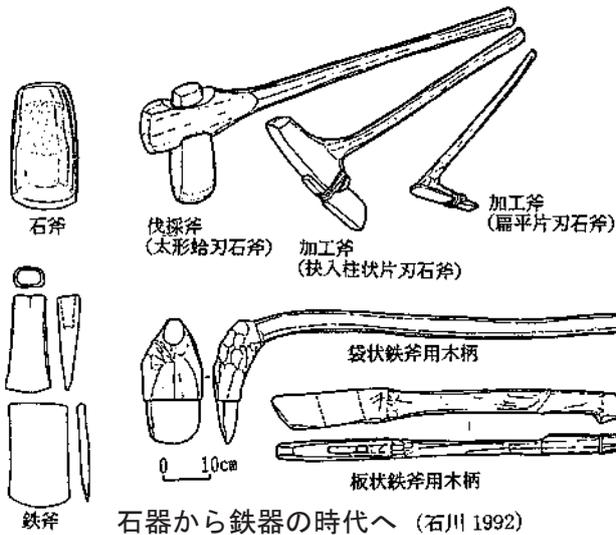
稲作（灌漑）が始まった（青森県垂柳遺跡）



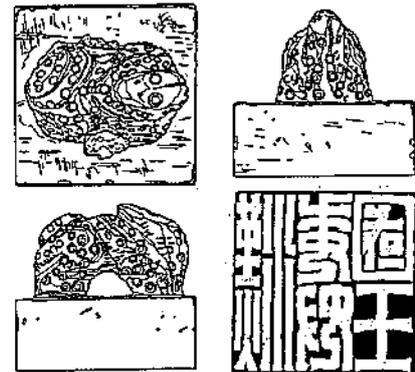
環濠集落（横浜市大塚遺跡）



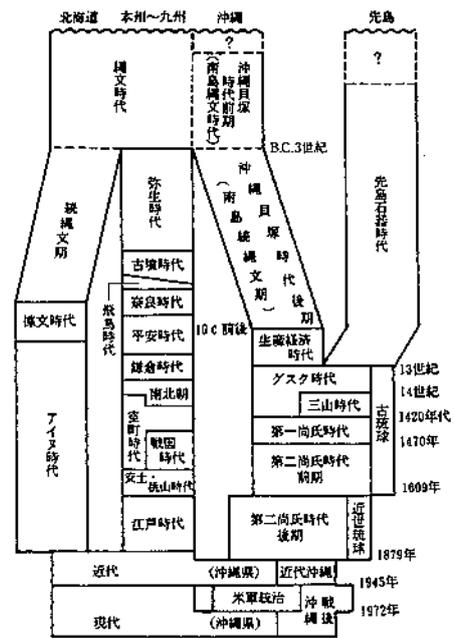
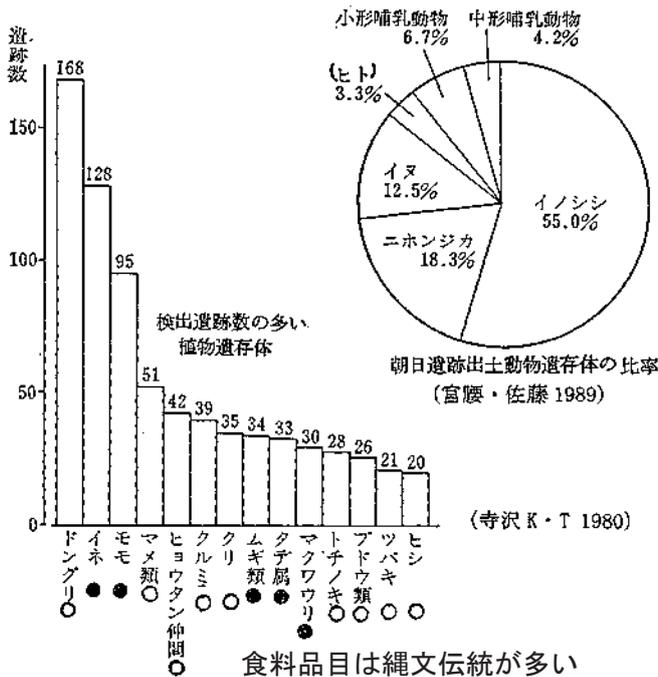
ムラの中の階層分化：Aが優位（佐賀県千塔山遺跡）



石器から鉄器の時代へ（石川 1992）



対外交渉：「漢委奴國王」金印（本田 2016）



日本列島の歴史の道の複線化（安里 1990 に加筆）

第 1 図 弥生時代とはどのような時代か

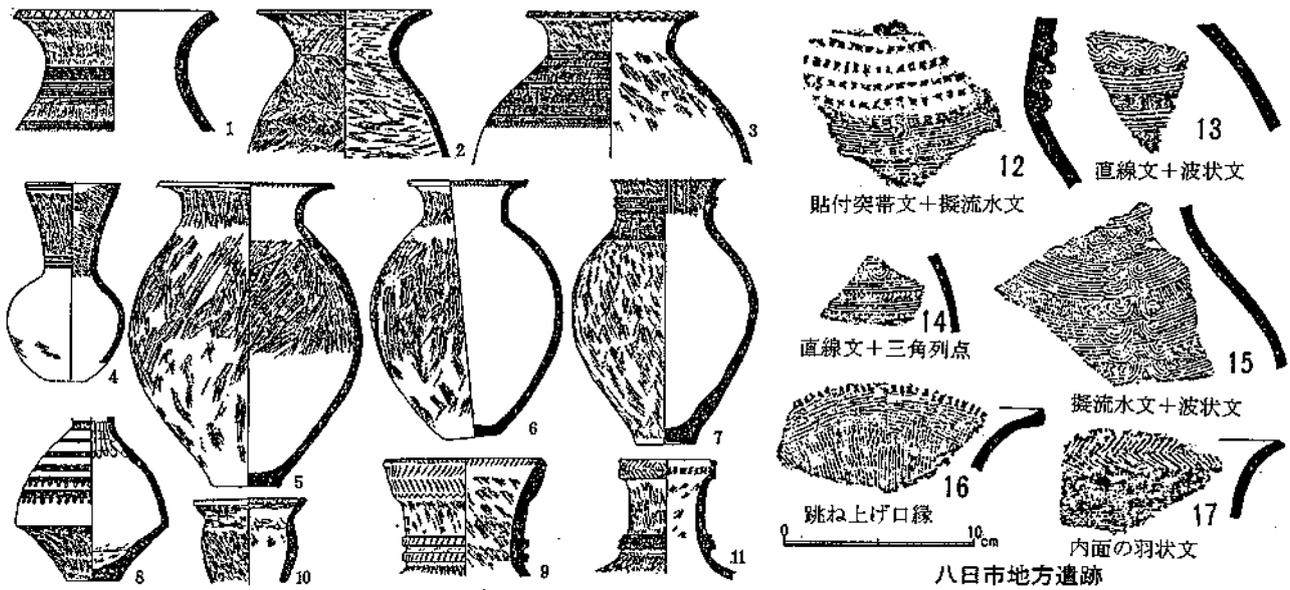
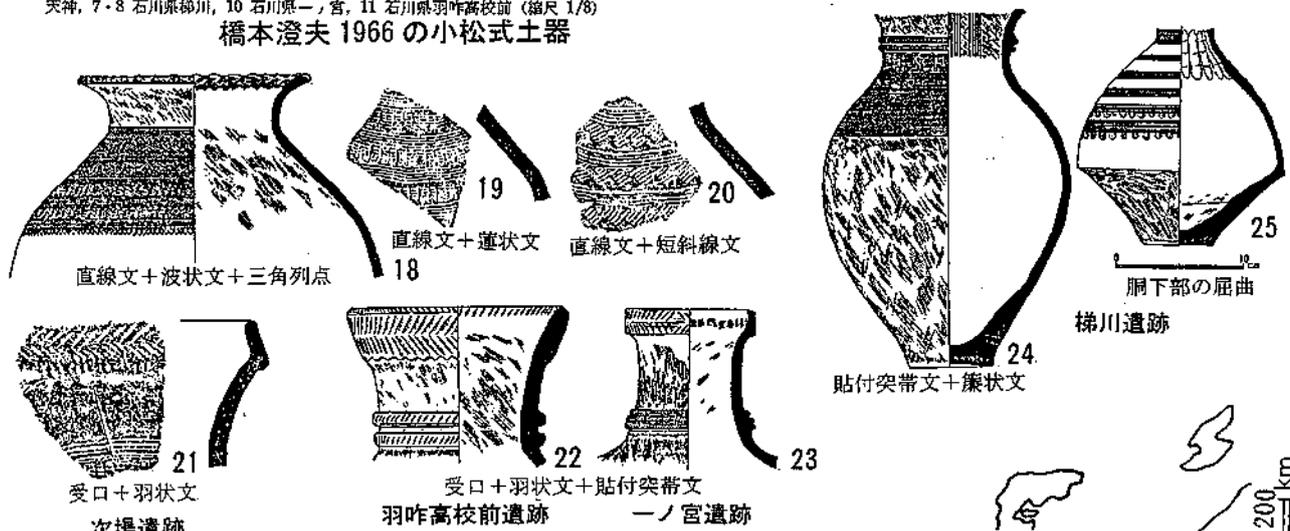
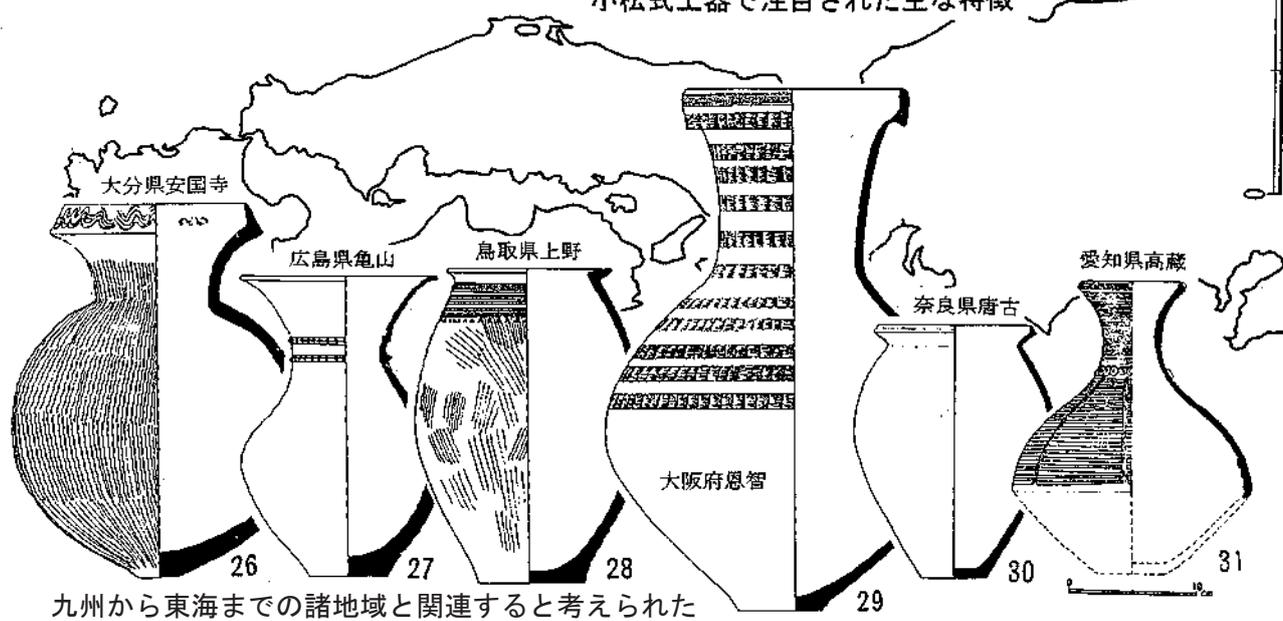


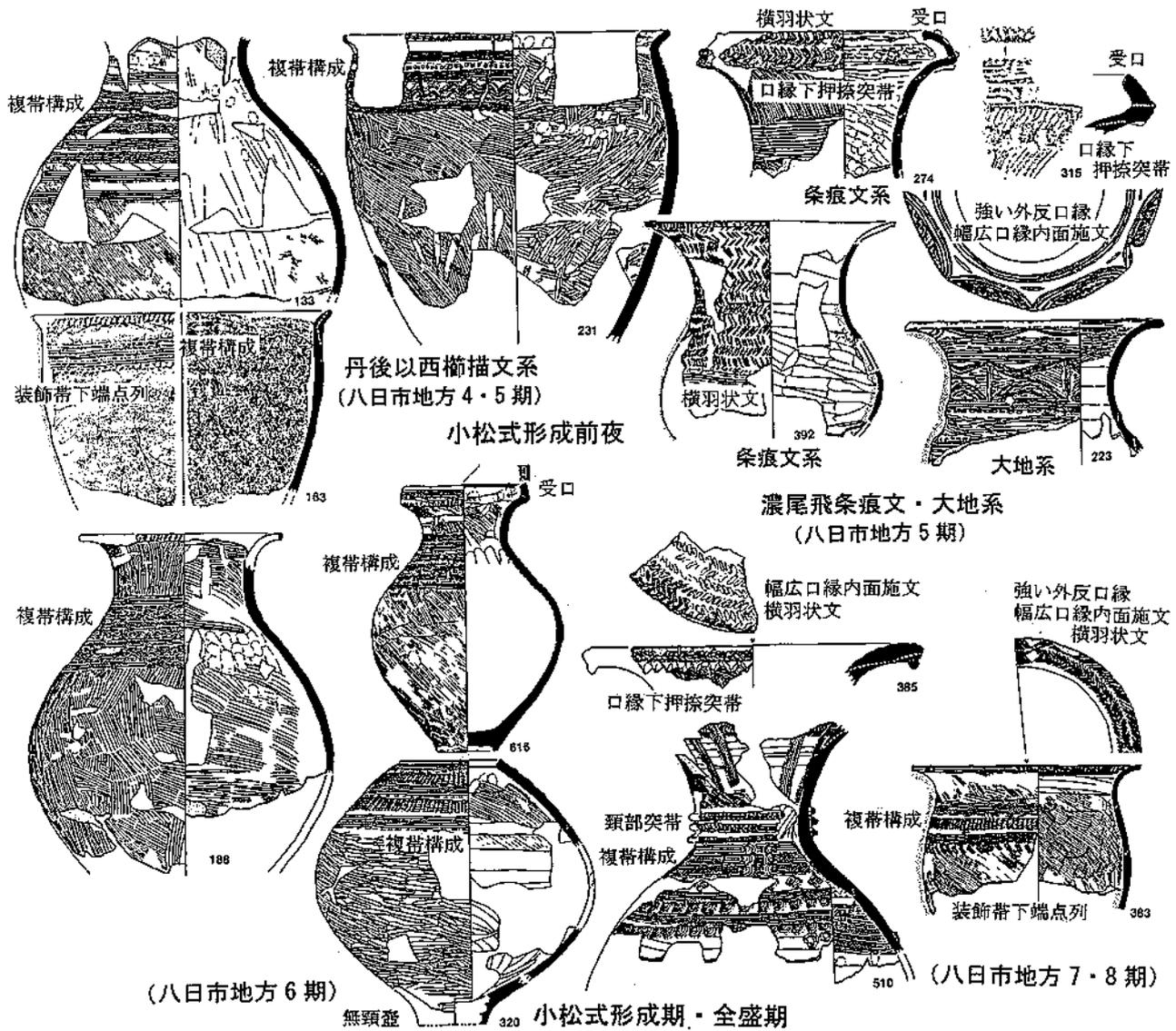
図2 第二次波及期の土器 1・2 石川県小松, 3・4・9 石川県次場, 5 富山県赤瀬父, 6 富山県岩瀬天神, 7・8 石川県梯川, 10 石川県一ノ宮, 11 石川県羽咋高校前(縮尺 1/8)  
橋本澄夫 1966 の小松式土器



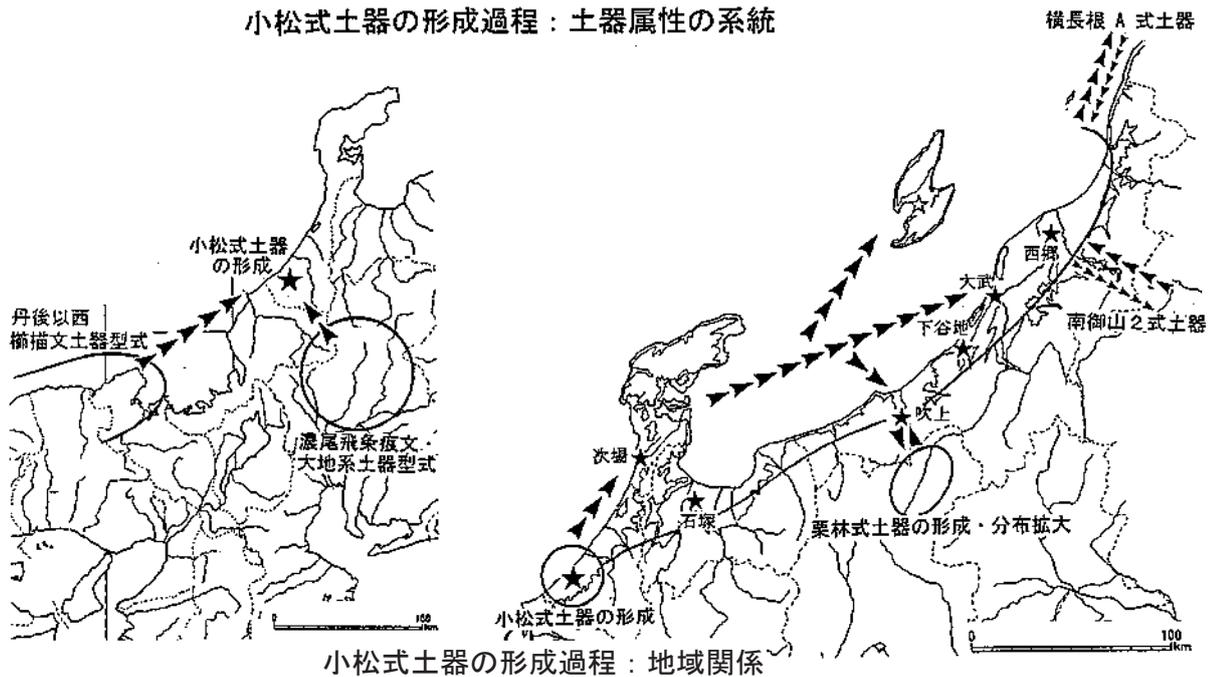
小松式土器で注目された主な特徴



第2図 1970年頃まで小松式土器はどのように考えられたか?

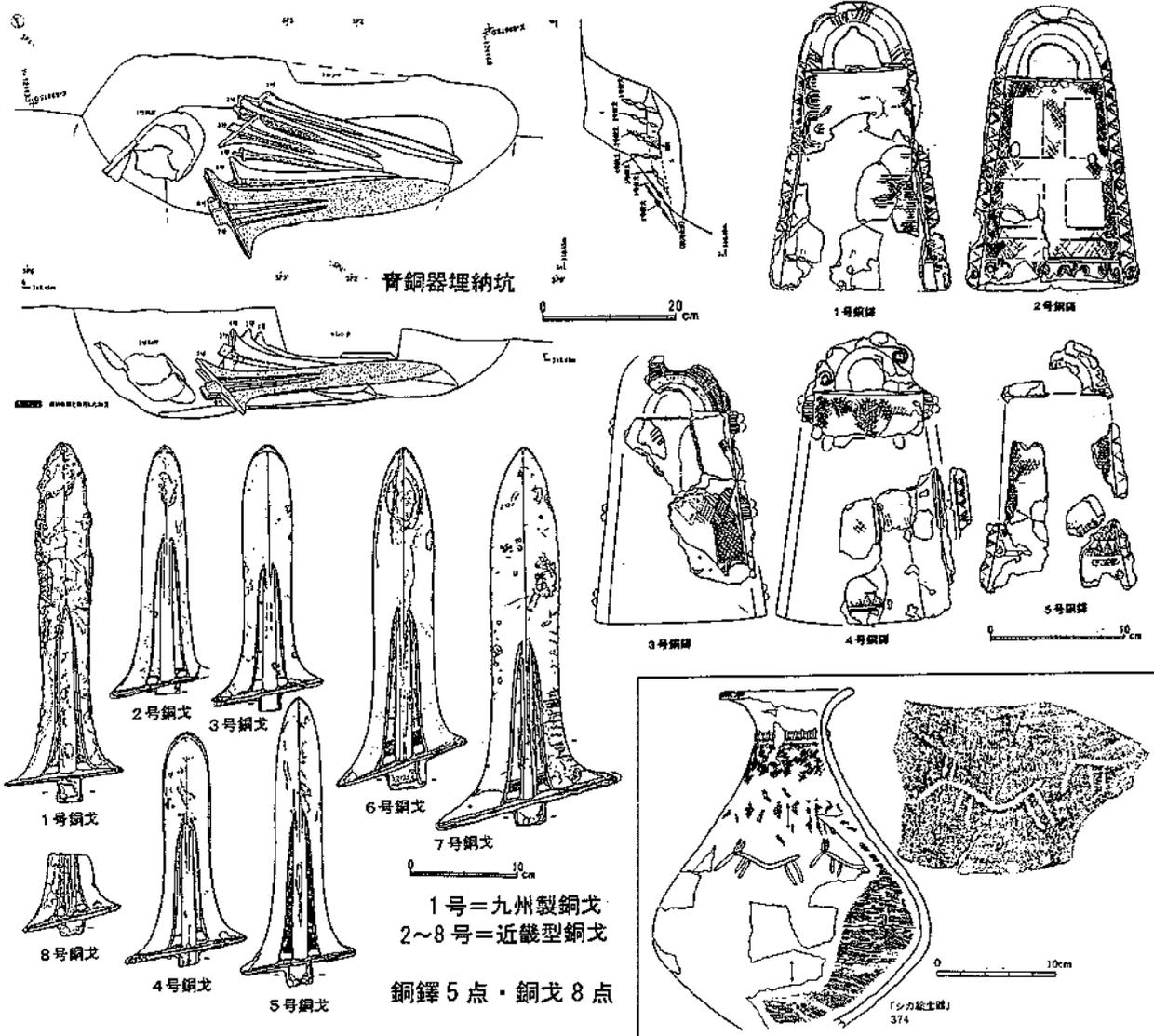


小松式土器の形成過程：土器属性の系統

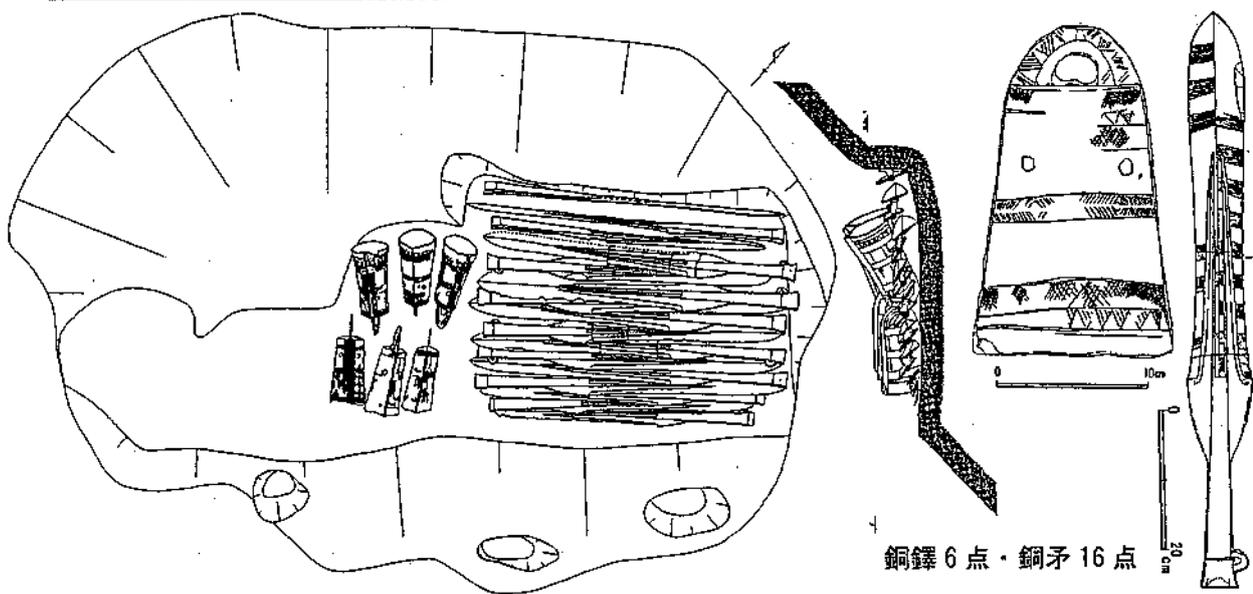


小松式土器の形成過程：地域関係

第3図 小松式土器の成立過程とその拡散および周辺型式との関係

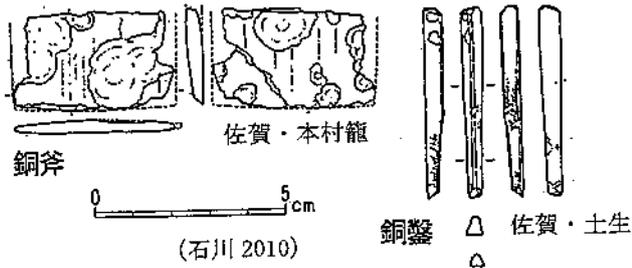


長野県中野市柳沢遺跡の銅鐸・銅戈埋納とシカ絵画土器 (報告書より)

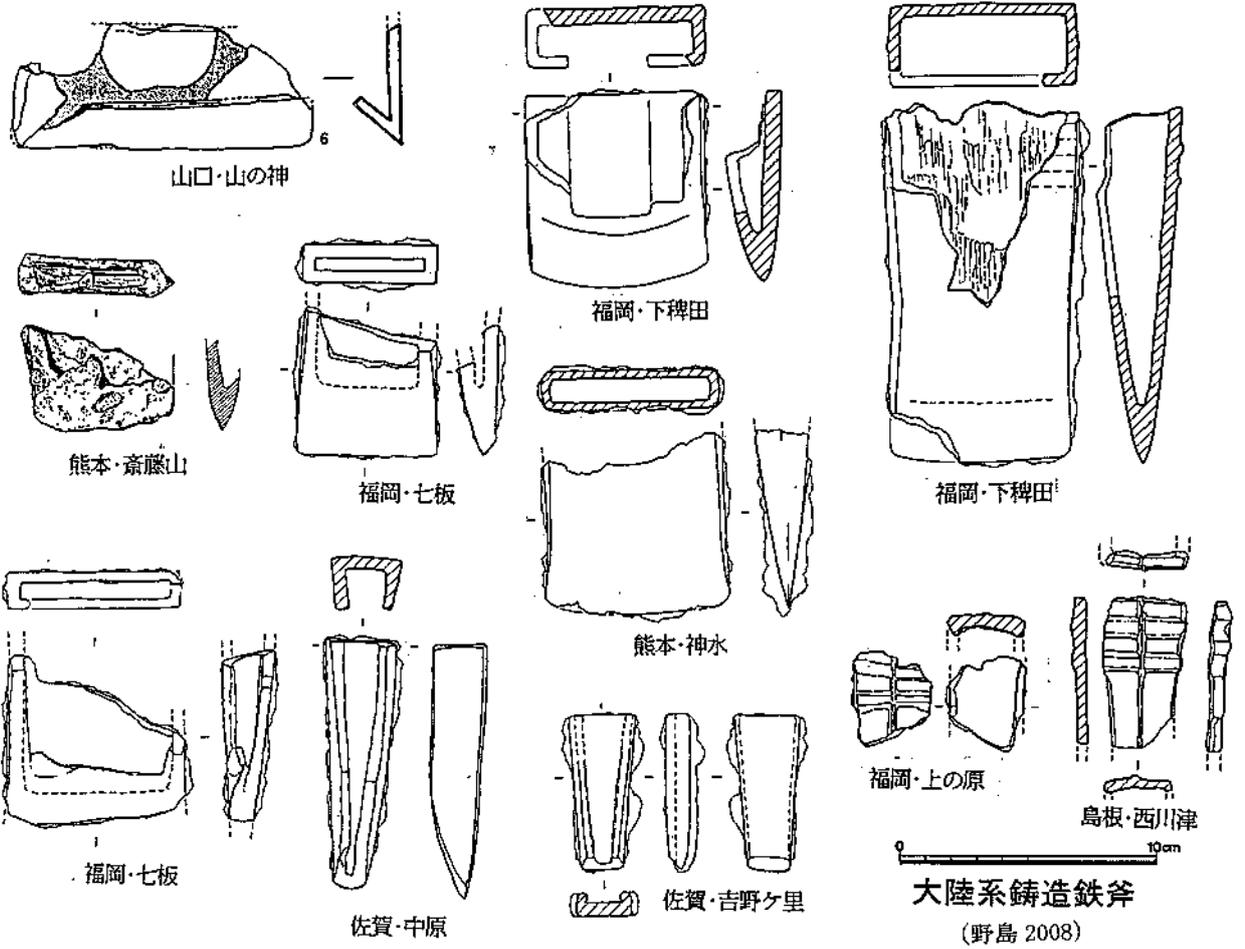
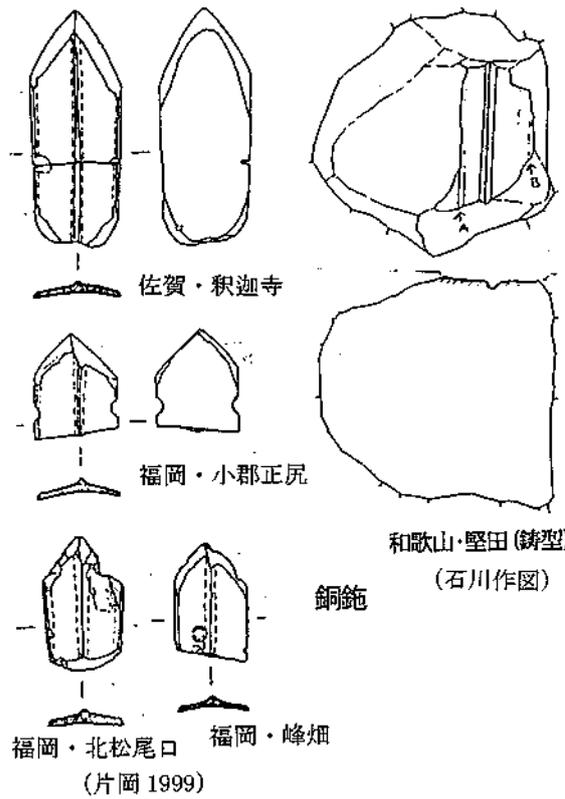
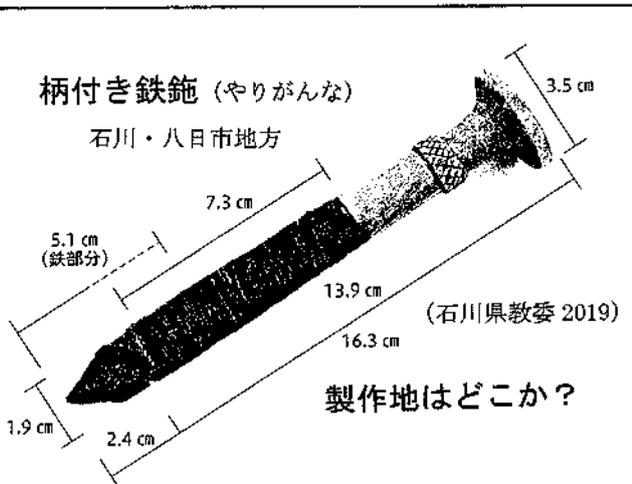


島根県出雲市神庭荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛埋納 (報告書より)

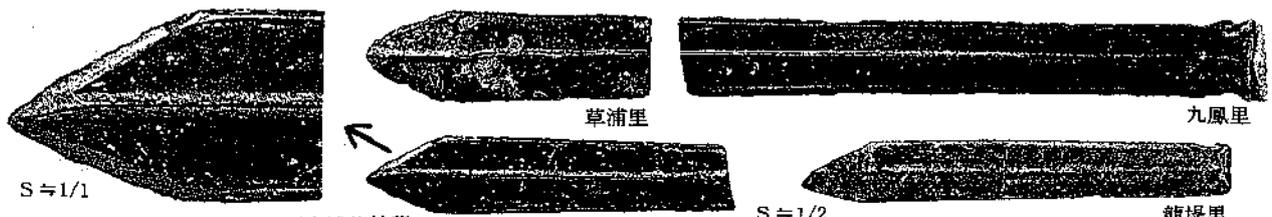
第4図 青銅器埋納法の北信濃と出雲の類似：小松式土器分布圏が介在！?



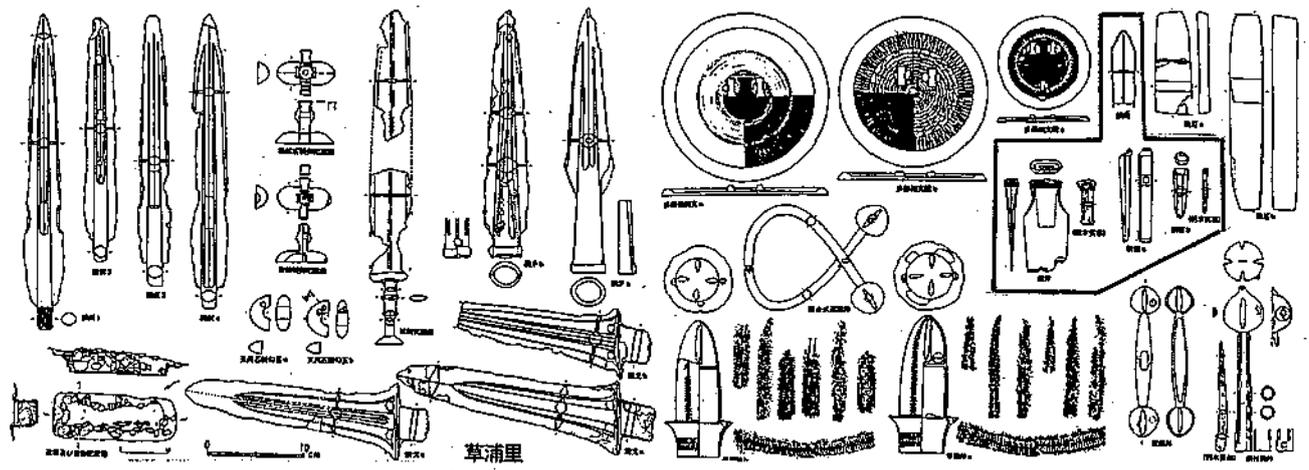
青銅製木工具の発見例は少ない



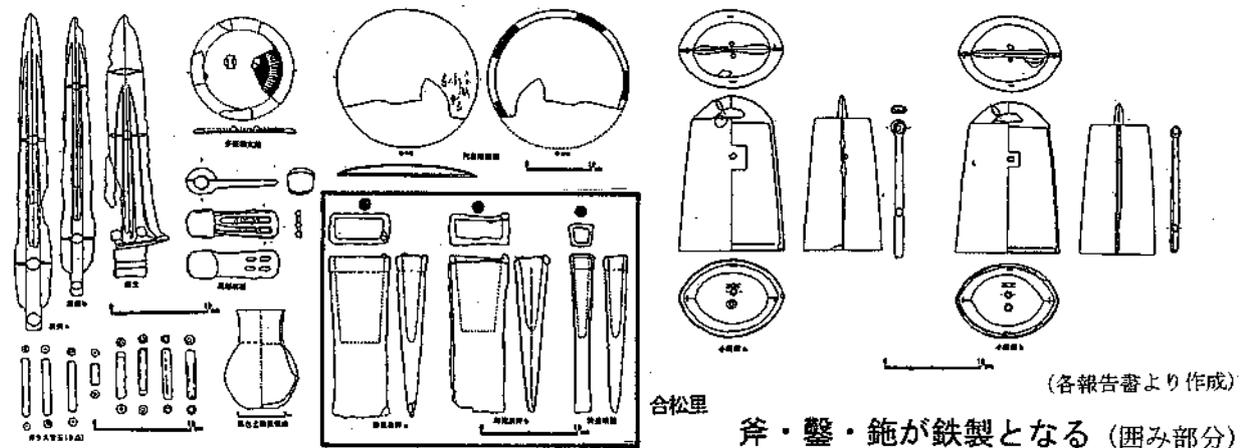
第5図 青銅製と鉄製の木工具



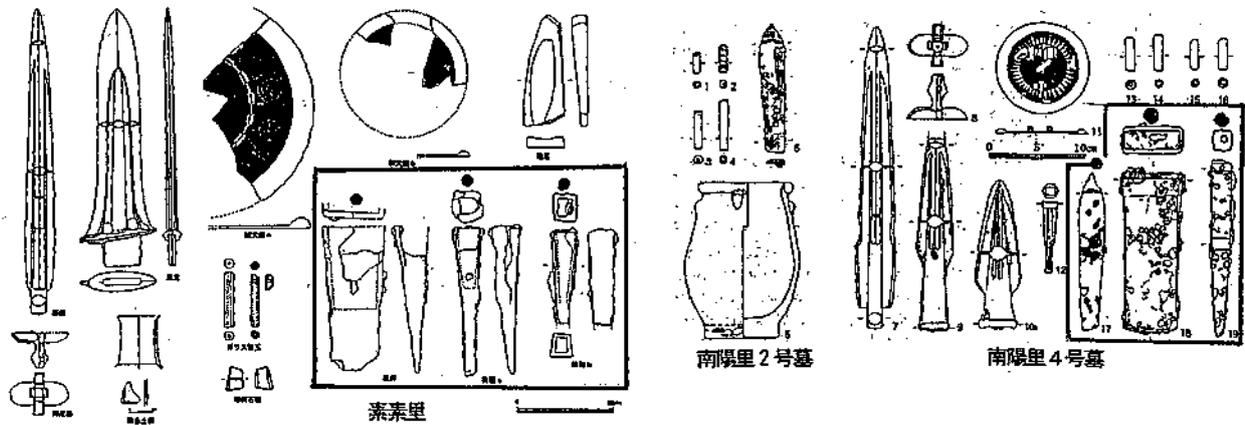
国立博物館蔵 韓国の青銅製銃（やりがんな） 『韓国の青銅器文化』1992



草浦里 斧・鏝・銃が青銅製（囲み部分） (報告書より作成)



合松里 斧・鏝・銃が鉄製となる（囲み部分） (各報告書より作成)



第6図 朝鮮半島南部（韓国）で木工具が青銅製から鉄製に替わる状況

日本列島では弥生時代前期末～中期前葉で、青銅器と鉄器が導入され、普及する段階に当たる

## 鉄製工具の普及と社会変化 —八日市地方遺跡が開く木工具研究の最前線—

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター  
 林 大智

### 八日市地方遺跡の概要 [遺跡の立地と周辺環境]

八日市地方遺跡は、J R 小松駅の東側一帯にひろがる弥生時代中期の大規模な環濠集落で、平坦な沖積低地に形成された南北方向に細長い標高 1 ~ 2 m 程度の微高地（砂主体の構成）に立地している。

遺跡の周辺は、梯川やその支流の合流地点にあたるとともに、干拓事業等で消滅・縮小した潟湖（今江潟・柴山潟・木場潟）および周辺の低湿地と近接することから、水上交通の要衝に位置する遺跡として捉えられる。

遺跡の所在地は、小松市土居原町、日の出町、こまつの杜、光町地内にあたり、遺跡名に付された「地方」は、「町方」に対して農村を示す江戸時代の用語に由来する。



図1 北陸地域の主な弥生時代遺跡

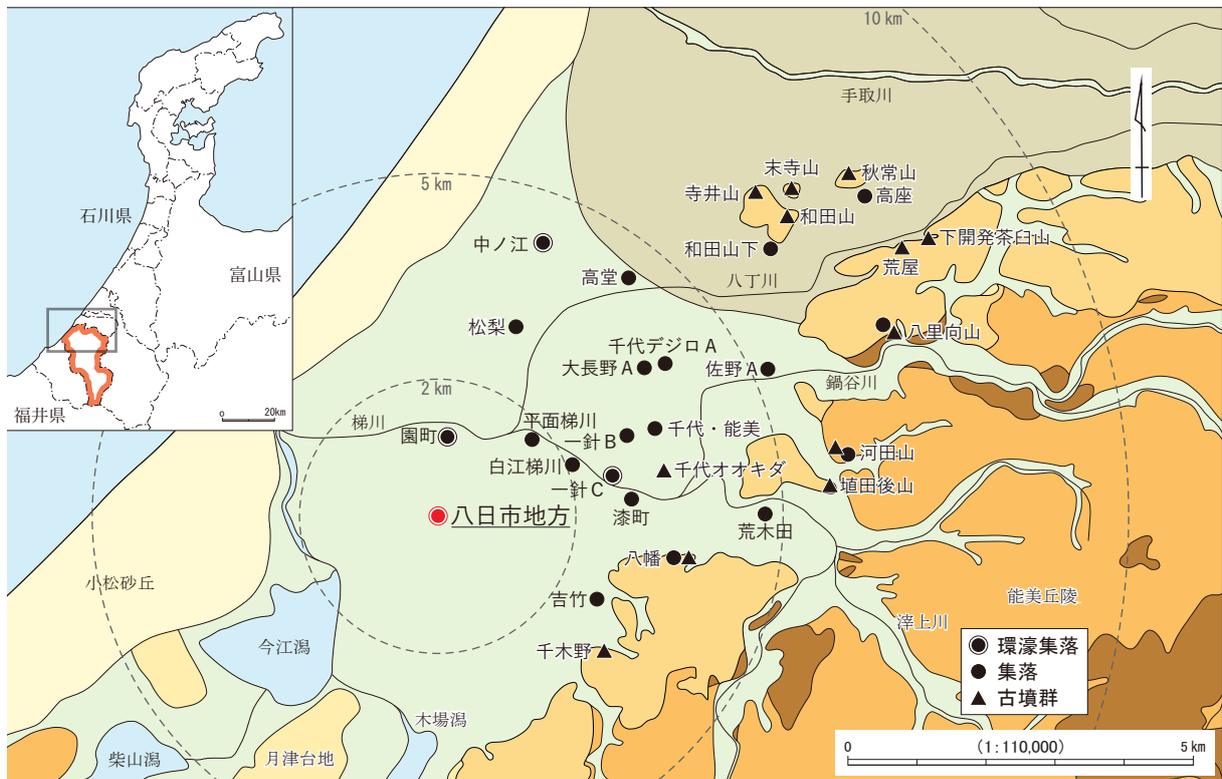


図2 弥生・古墳時代における梯川流域の遺跡分布図〔縮尺 1/110,000〕(林 2012 を一部改変)

時代区分	八日市地方		畿内 様式	西暦			八日市地方 遺跡の変遷	日本列島 の動向	中国・朝鮮半島 の動向	中国 大陸	朝鮮 半島
	集落	土器		AMS	年輪	酸素					
縄文晩期		0									
弥生前期		1	I	-550				西日本に水稻耕作が拡散		春秋	
		2		-400			川跡に遺物散見		BC.403 三晋の成立(趙、魏、韓)		
		3						金属器使用の開始			
弥生中期前葉	I 期	4	II	-350			環濠集落の成立			戦国	古朝鮮
		5									
弥生中期中葉	II 期	6		-300			環濠再掘削 居住域拡大		BC.312 ~ 279 燕の東方進出	秦	衛氏朝鮮
		7	III		-283+	-250+	環濠再掘削	東日本で広域な社会変動	BC.221 秦の始皇帝が中国統一		
		8		-200					BC.202 高祖(劉邦)が漢王朝を興す BC.195 衛氏朝鮮の成立		
弥生中期後葉	III 期	9			-136	-139+	居住域縮小			前漢	衛氏朝鮮
		10	IV	-100 -40					BC.108 前漢が朝鮮半島に四郡を設置		
弥生後期			V	80			集落衰退	鉄器生産の開始 AD.57 奴国王が後漢に使い(金印賜与)	AD.25 光武帝即位(後漢のはじまり)	新後漢	原三国

図3 「柄付き鉄製鉞」の時期と関連年表（小松市教育委員会 2016『八日市地方遺跡II』を基に作製）

### 1 鉄製工具の導入と木工具構成の変遷

北陸地域では、弥生時代前期末～中期前葉に大陸系磨製石斧が定着し始め、縄文時代に系譜をもつ両刃磨製石斧とともに、木工具の主体的役割を担う。

八日市地方遺跡では、集落I期(中期前葉)に大陸系磨製石斧が出揃い、対応する斧柄も確認できる。この時期の太型蛤刃石斧は、幅6cm、厚さ4cmを超える重厚なものと、幅、厚みともに前者を下回る小振りなものに区分でき(図4)、扁平片刃石斧は、長さ(6cm強)に対して幅が狭い形態を呈する(図5)。

集落II期(中期中葉)には、前段階の磨製石斧を主体とする木工具構成に鉄製工具が加わる一方で、磨製石斧の出土点数が増加しており、特に両刃・太型蛤刃石斧で著しい(図7)。

集落III期(中期後葉)は、木工具構成内で鉄製工具の存在感がさらに増加する反面、磨製石斧は急激に数量を減少せず、片刃石斧では小型扁平・鑿状が増加しており、鉄製工具の導入・普及後も、長期間にわたり石製工具が併用されていたことを窺える。

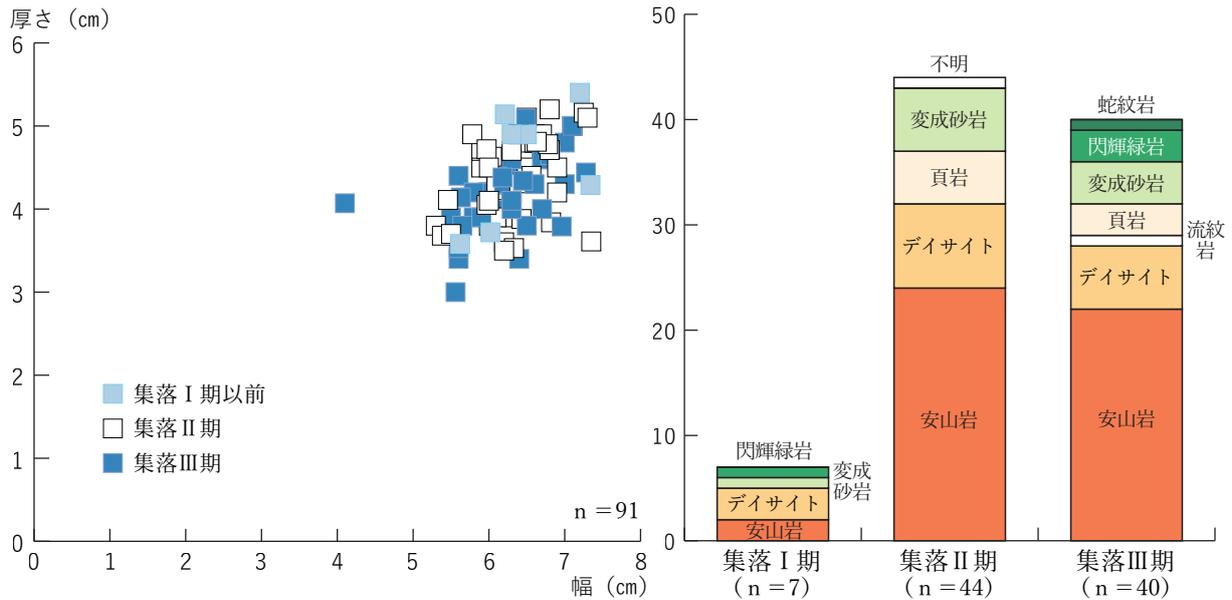


図4 八日市地方遺跡から出土した太型蛤刃石斧の法量（厚さ / 幅）と使用石材の変遷

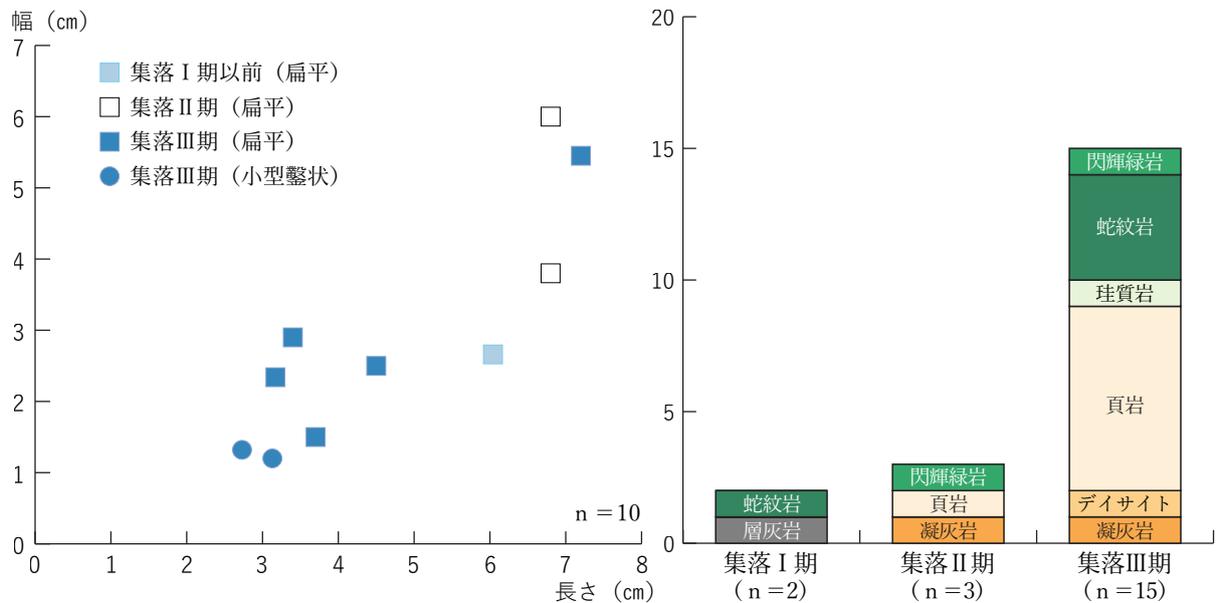


図5 八日市地方遺跡から出土した片刃石斧の法量（幅 / 長さ）と使用石材の変遷

一方、集落II期(中期中葉)に相当する「柄付き鉄製ヤリガンナ」の発見は、過去の発掘調査でも発見されていた鉄器装着用の木製斧柄、木製品や骨角器に遺された加工痕、鉄刃を手入れするための砥石などを再評価する契機となった。なかでも、中国大陸や朝鮮半島から日本海を越えてもたらされた鑄造鉄斧を装着するための木製柄は、小松市調査分とあわせて13点に達することが判明し、弥生時代中期の日本列島で最多の出土量をほこる。また、斧台装着部の法量や形状などからは、使用された鑄造鉄斧に複数のバリエーションが認められることも明らかになってきた(図8)。

さらに、河道堆積土の水洗選別作業では、微小な青銅製工具(ノミ)や鉄片も見つかっており、八日市地方遺跡では多種類の金属製工具と石製工具を併用した工具構成により、弥生時代中期の長期間にわたり精巧な木製容器・食事具に代表される多彩な「ものづくり」が行われていたことを推測できる。

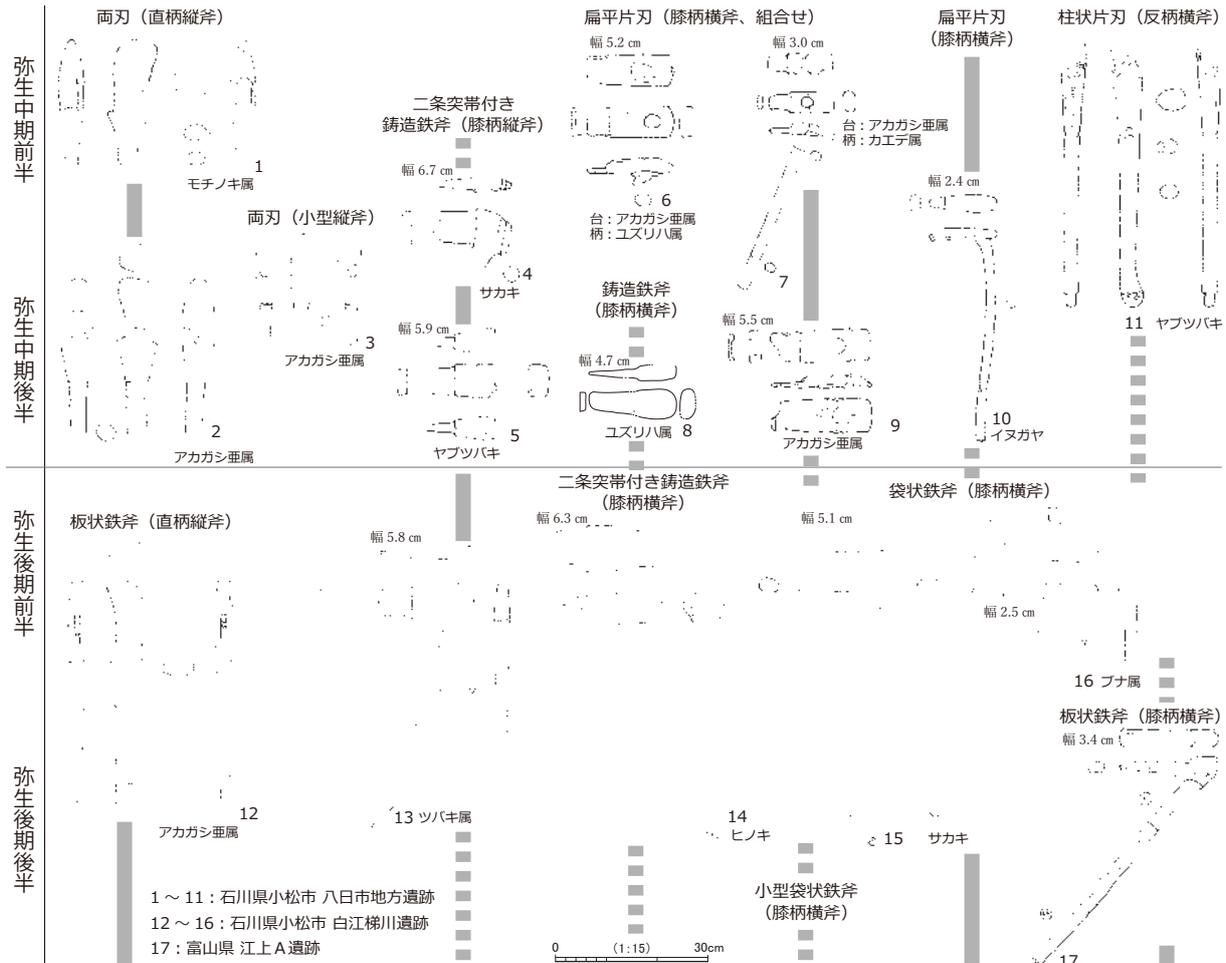


図6 北陸地域における弥生・古墳時代の斧柄変遷 (縮尺：1/15)

	石斧			斧柄		
	蛤刃	両刃	片刃	両刃石斧柄	片刃石斧柄	鉄斧柄
集落Ⅰ期 (弥生中期前葉) 以前 (八日市地方 5期以前)	9	19	3	8	6	0
集落Ⅱ期 (弥生中期中葉) (八日市地方 6～8期)	47	64	5	23	14	5
集落Ⅲ期 (弥生中期後葉) (八日市地方 9・10期)	41	46	15	25	23	8
小計	97	129	23	56	43	13

※両刃石斧：刃部が両刃をなす磨製石斧のうち、大型蛤刃石斧と認定できないもの。定角式や乳棒状石斧を含む。  
両刃石斧柄：両刃石斧および大型蛤刃石斧への着柄が想定される木製縦斧柄

図7 八日市地方遺跡出土の石斧と斧柄の時期別数量推移

## 2 “みえざる鉄器”の追求と鉄器普及の実態

鉄器導入期である弥生時代中期の木製品に遺された加工痕からは、鉄製工具の具体的な使用状況を窺うことができる。なかでも、伐採から粗割り段階の木材に顕著な幅が広く平坦で、刃先や刃端が木材にくい込んだ鉄製工具による加工痕は、弥生時代中期中葉古段階(八日市地方遺跡6期)で確実に出現し、中期後葉のミカン割り材や切断材などで通有に認められる。また、扁平片刃用と想定される膝柄横斧柄の一部には、鑄造鉄斧の破片を再加工した鉄斧が装着された可能性が高い。

一方で、鉄製工具が増加する集落Ⅲ期(中期後葉)の伐採斧柄は、両刃・大型蛤刃石斧柄が25点確認できるのに対して、鉄斧柄は8点で伐採斧に占める鉄斧の比率は3割程度に留まる(図7)。

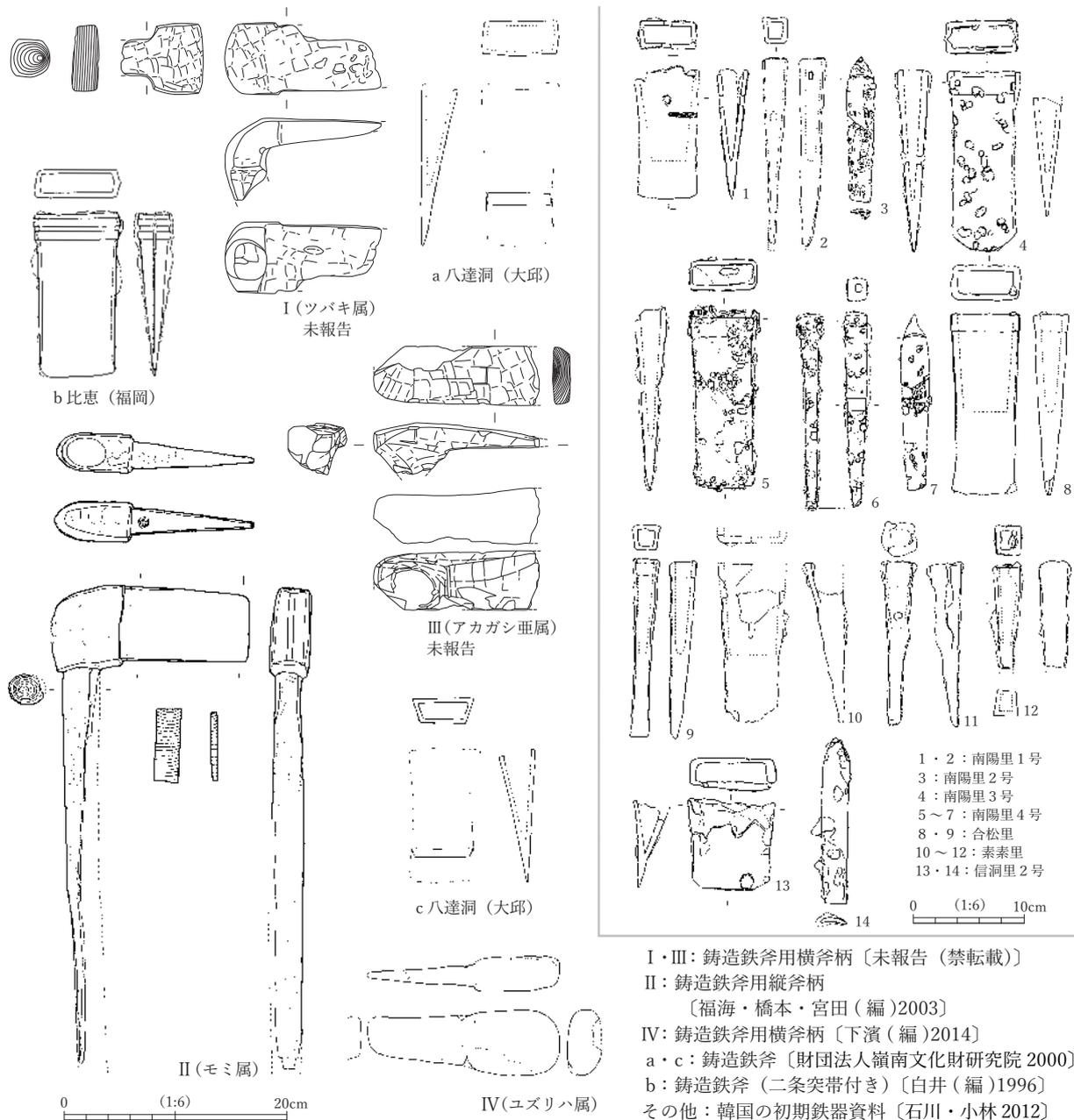


図8 八日市地方遺跡から出土した鑄造鉄斧柄および関連資料 (縮尺: 1/6)

### 3 弥生時代中期の木製品生産

八日市地方遺跡では、弥生時代中期を通じて盛んに木製品生産を行っており、なかでも、26地区河道肩部が河道左岸域における木製品生産の中心的役割を担っている。木工具の組成に鉄製工具が加わる集落II期(中期中葉)には、木製品生産関連遺物の集中箇所を多数派生させ、鑄造鉄斧を保有する単位が製材や切断工程を主体的に担うなど、近接する遺物集中箇所間で製作工程を一定程度分担する生産体制を構築した可能性が高い(図9・10)。

鉄製工具が増加する集落III期(中期後葉)では、前段階に多数存在していた木製品生産関連遺物の集中箇所が減少するとともに、製作工程の分担が低調となり、居住域ごとに木製品生産単位が成立する。一方、26地区河道肩部には、多くの生産関連遺物が集められ、河道左岸域における多様な木製品(特に精製容器・食器具)の集中的な生産を担う「木製品工房」化していく傾向を窺うことができる。

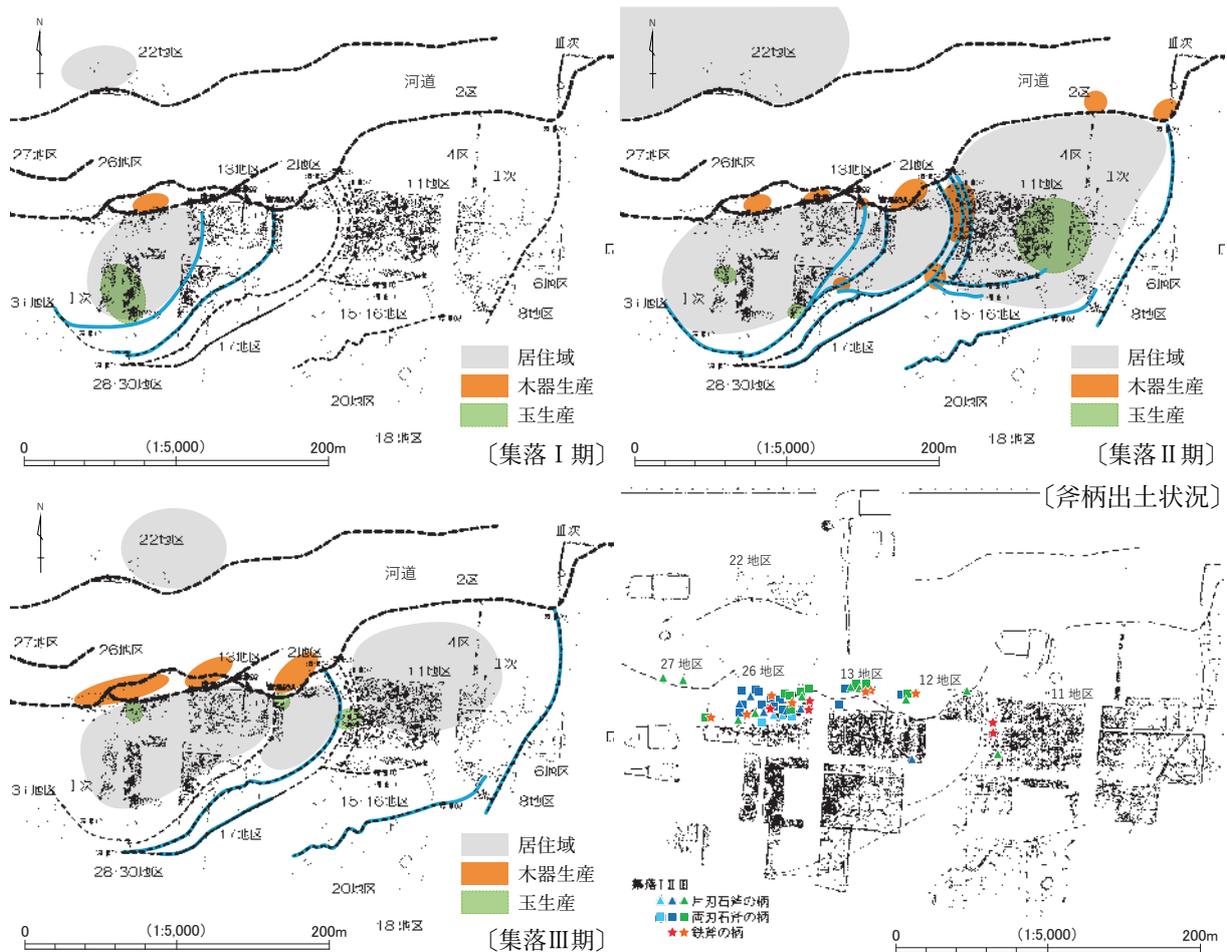


図9 八日市地方遺跡における木製品生産関連遺物集中箇所推移と斧柄出土状況  
(下濱(編)2016の第III章第1~4図を合成)

集 落	Ⅱ 期										Ⅲ 期		
	26 (河道)	26 (河道)	13 (河道)	13 (環濠)	16 (環濠)	11・12 (環濠)	12 (河道)	17 (環濠)	2 (環濠)	Ⅲ (河道)	26 (河道)	13 (河道)	12 (河道)
工 具	5	1	3	0	1	1	0	0	0	1	2	2	0
農 具	17	16	20	1	2	4	4	0	0	1	36	2	11
容 器・ 食 事 具	10	4	5	0	0	0	4	0	0	1	9	1	1
弓	3	3	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1
切断材A	24	24	7	2	1	26	9	3	1	0	64	10	7
切断材B	27	27	8	1	0	24	6	0	3	0	69	9	9
切断材C	7	7	10	2	2	14	3	0	3	0	34	2	5
ミカン割材	20	44	7	0	0	16	6	3	0	0	45	4	10
小 計	113	126	62	6	6	86	33	6	7	3	259	30	44

※切断材：両端に切断痕が確認されるもので、器種の限定ができない未成品もしくは残核と判断されるもの  
(A:板状のもの、B:多角形状・円柱状のもの、C:それ以外のもの)

図10 八日市地方遺跡における遺構別木器生産関連遺物の数量比較 (下濱(編)2016)

#### 4 木工具の鉄器化と生産体制の転換(弥生時代後期)

ほぼすべての木工具が鉄器化する弥生時代後期には、八日市地方遺跡に代表される中核的集落  
が衰退・廃絶し、小水系単位に中・小規模集落が増加することで遺跡群が形成される。遺跡群に  
は、集中的な生産単位を継承した工房的集落が出現し、集落間分業体制が成立したことを窺える。

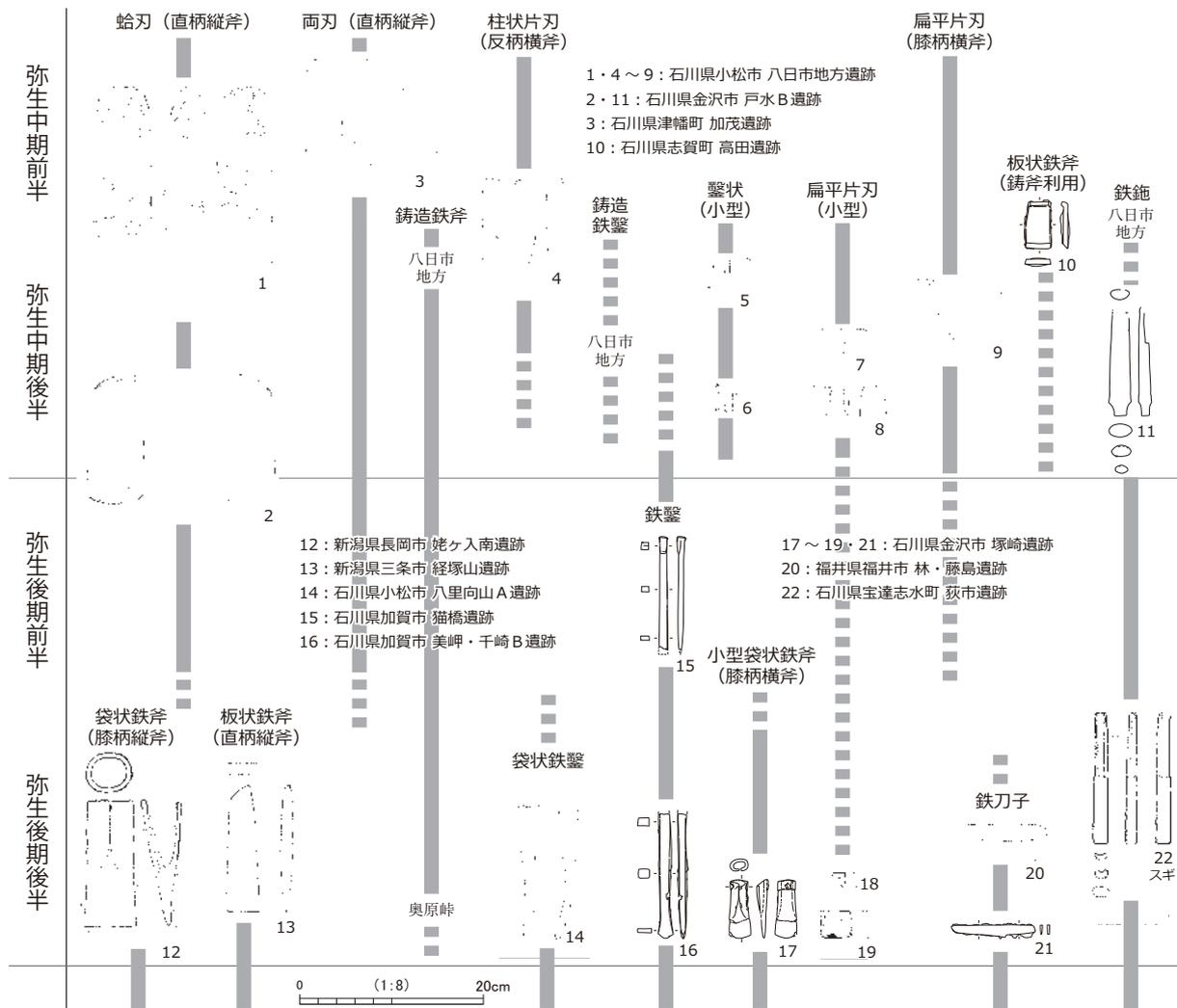


図 11 北陸地域における弥生・古墳時代の主要木工具変遷 (縮尺: 1/8)

八日市地方遺跡 (弥生時代中期)

	未成品 (連結)	未成品 (単独)	完成品	合計
狭 鋏		5	12	17
広 鋏	10	31	19	60
横 鋏		1	1	2
又 鋏		1	10	11
曲柄鋏			4	4
泥 除		8	4	12
一木鋤			1	1
組合鋤		3	22	25
鋏・鋤計	10	49	73	132
伐採斧(石)		9	11	20
加工斧(石)		6	20	26
伐採斧(鉄)			6	6
加工斧(鉄)			1	1
斧 計	0	15	38	53

江上A遺跡 (弥生時代後期後半)

	未成品 (連結)	未成品 (単独)	完成品	合計
狭 鋏			1	1
広 鋏			11	11
横 鋏			1	1
又 鋏			1	1
曲柄鋏			4	4
泥 除			9	9
一木鋤			0	0
組合鋤			4	4
鋏・鋤計	0	0	31	31
伐採斧(石)			0	0
加工斧(石)			0	0
伐採斧(鉄)			0	0
加工斧(鉄)			2	2
斧 計	0	0	2	2

千代・能美遺跡 (古墳時代前期)

	未成品 (連結)	未成品 (単独)	完成品	合計
狭 鋏			0	0
広 鋏		1	10	11
横 鋏			2	2
又 鋏			0	0
曲柄鋏			17	17
泥 除		1	5	6
一木鋤			0	0
組合鋤			2	2
鋏・鋤計	0	2	36	38
伐採斧(石)			0	0
加工斧(石)			0	0
伐採斧(鉄)			0	0
加工斧(鉄)			3	3
斧 計	0	0	3	3

図 12 北陸地域における木製農工具未成品の出土数量変遷

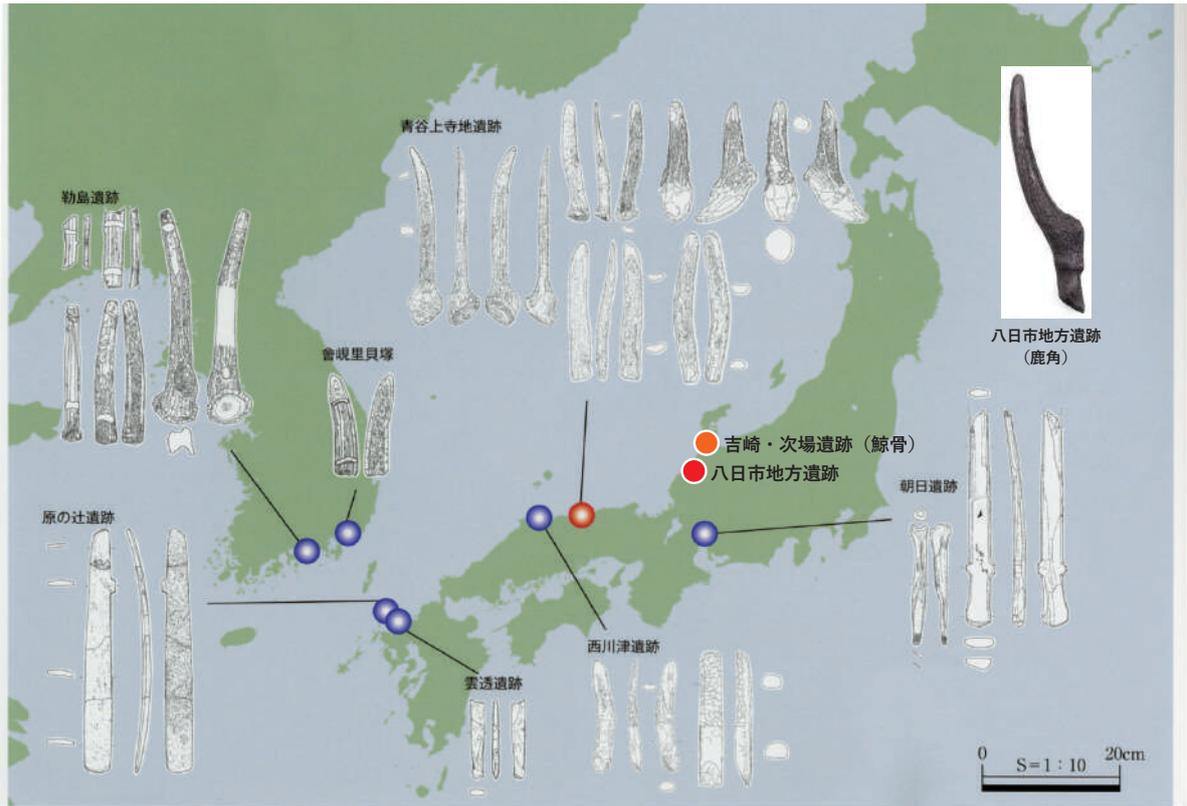


図13 鹿角製および鯨骨製アビオコシの分布 (鳥取県埋蔵文化財センター 2011 に加筆)

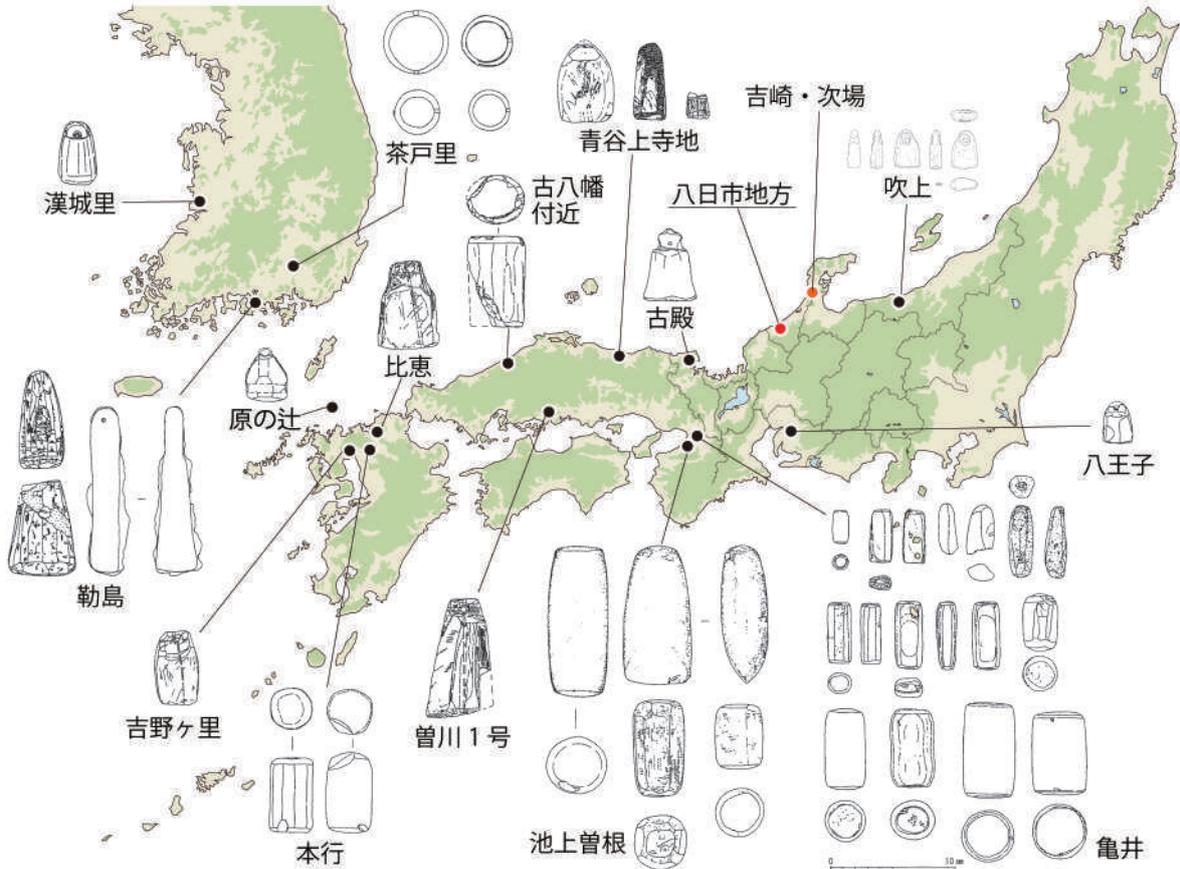


図14 日韓出土の天秤権と桿秤権 (武末 2018 を基に作成)

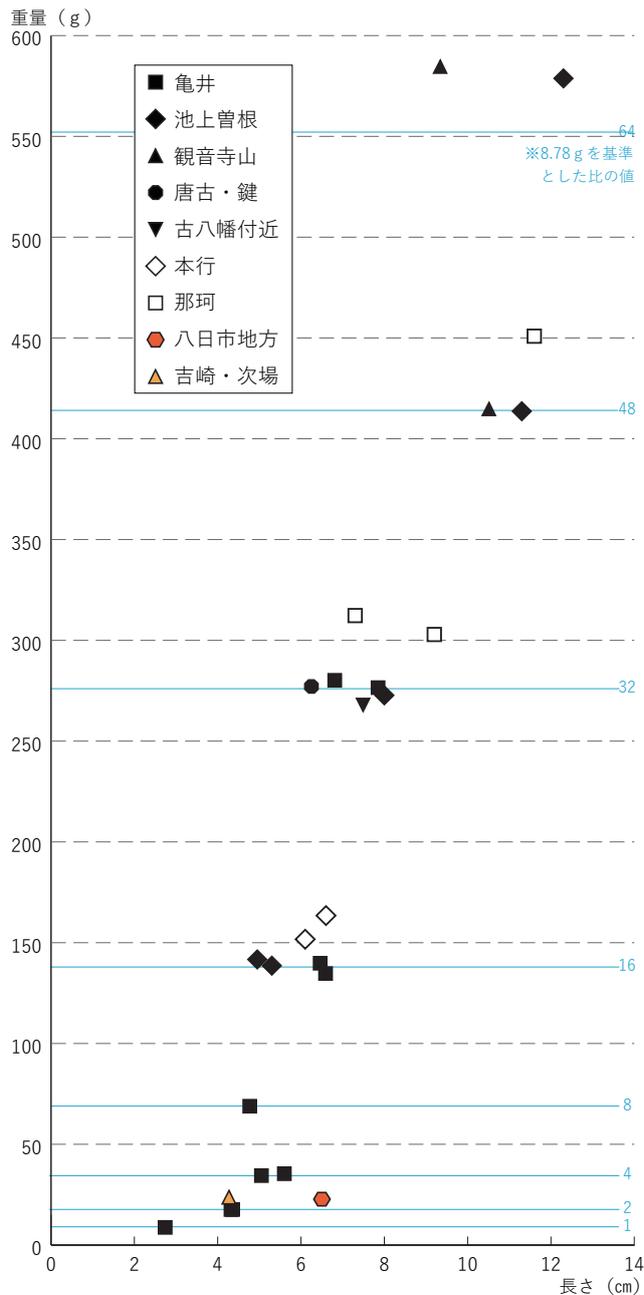


図15 天秤権の質量分布 (中尾 2019 に加筆)



図16 八日市地方遺跡の天秤権



図17 吉崎・次場遺跡の天秤権



図18 八日市地方遺跡の擬無文土器

## 5 鉄製工具普及の担い手とその背景

八日市地方遺跡には、集落内で製作・使用された小松式土器に加えて、他地域から搬入された土器や模倣品が多くみられ、広範で活発な地域間交流の片鱗を示す。これらのなかには、朝鮮半島南部の円形粘土帯土器を模倣して製作された擬無文土器(図18)も含まれており、<sup>ぎむもん</sup>擬無文土器を模倣して製作された<sup>ほくさい</sup>船載鉄器普及の担い手を推し量ることができる。

また、八日市地方遺跡と羽咋市吉崎・次場遺跡では、西日本の日本海沿岸域で散見される鯨骨や鹿角の分割素材を用いた「アワビオコシ」や紡錘車が見つかるとともに(図13)、<sup>てんびんけん</sup>天秤権と判断される円筒形の石製品が出土しており(図15~17)、弥生時代中期の北陸地域に、朝鮮半島南部や北部九州と共通する質量系列の計量技術が導入されていた可能性と、それを整備・運用しうる高度な社会システムに基づく、漁撈民(水人)を介した海村交易(武末2018)が存在したことを示唆する。

[引用・参考文献]

- 久々忠義ほか1984『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』 上市町教育委員会
- 邱隆・丘光明・顧森・劉東瑞・巫鴻(編)1985『中国古代度量衡図集』みすず書房
- 石神幸子(編)1992『河内平野遺跡群の動態Ⅴ－南遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編－』大阪府教育委員会・財団法人  
大阪文化財センター
- 上原真人1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 白井克也(編)1996『比恵遺跡群21－第51次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第452集 福岡市教育委員会
- 村上恭通1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 穂積裕昌2000『弥生時代から古墳時代の木器生産体制について～三重県内の木器出土遺跡からの素描～』『研究紀要』  
第9号 三重県埋蔵文化財センター
- 財団法人嶺南文化財研究院2000『大邱八達洞遺蹟I』嶺南文化財研究院 學術調査報告第20冊
- 若林邦彦2001『弥生～古墳時代における製作途上木製品の出土傾向～鉄器普及との関連～』『大阪文化財研究』第20号  
財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 福海貴子・橋本正博・宮田 明(編)2003『八日市地方遺跡I』小松市教育委員会
- 村上恭通・山村芳貴2003『農工具』『考古資料大観』第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金属製品 小学館
- 武末純一2006『韓国の鑄造梯形鉄斧－原三国時代以前を中心に－』『七隈史学』第7号 七隈史学会
- 野島 永2008『1.弥生時代の初期鉄器』『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17年度～  
平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書
- 林 大智2009『北陸における弥生時代の生産と流通』『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
- 飯塚武司2010『弥生時代中期の木器工房と工人』『古代学研究』第188号 古代学研究会
- 鳥取県埋蔵文化財センター(編)2011『弥生・骨角器サミット～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』青谷上寺地遺跡フォーラム
- 石川岳彦・小林青樹2012『春秋戦国期の燕国における初期鉄器と東方への拡散』『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集  
国立歴史民俗博物館
- 中村大介2012『燕鉄器の東方展開』『埼玉大学紀要(教養学部)』第48巻第1号 埼玉大学教養学部
- 林 大智2012『小松市 千代・能美遺跡』 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 森本 晋2012『弥生時代の分銅』『考古学研究』第59巻第3号 考古学研究会
- 塚本浩司(編)2013『弥生人の船 モンゴロイドの海洋世界』平成25年度大阪府立弥生文化博物館夏季特別展 大阪府立弥生  
文化博物館
- 林 大智2013『第7節 北陸における木製品研究の現状と課題』『木製品から見た古代のくらし』島根県古代文化センター
- 下濱貴子(編)2014『八日市地方遺跡II 第3・4部』小松市教育委員会
- 李 昌熙2014『韓半島における初期鉄器の年代と特質』『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 国立歴史民俗博物館
- 下濱貴子(編)2016『八日市地方遺跡II 第5～7部』小松市教育委員会
- 樋上 昇(編)2017『木製品からみた鉄器化の諸問題』シンポジウム記録10 考古学研究会
- 林 大智2017『北陸における農工具の鉄器化について』『同上』
- 武末純一2018『日韓交流と渡来人－古墳時代前期以前－』『古代東ユーラシア研究センター年報』第4号 専修大学社会知性  
開発研究センター
- 中尾智行2018『弥生時代の計量技術』『考古学研究』第65巻第2号 考古学研究会
- 樋上 昇・田中 謙・鶴来航介2018『木製品からみた金属製工具の利用』『鉄器招来』当日資料 石川県教育委員会・  
(公財)石川県埋蔵文化財センター・小松市教育委員会
- 吉田恵二2018『文房具が語る古代東アジア』ものが語る歴史38 同成社
- 中屋克彦(編)2019『小松市 八日市地方遺跡 北陸新幹線建設事業(金沢・敦賀間)に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書』  
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 中尾智行2019『弥生時代の計量技術と地域性 天秤権研究のこれから』『辻尾榮市氏古稀記念 歴史・民族・考古学論攷』  
第Ⅲ集(郵政考古紀要第71号) 辻尾榮市氏古稀記念刊行会
- 林 大智2019『木工具から読み解く木製品生産の動態』『古代学研究』第222号 古代学研究会
- 古澤義久2019『魏志倭人伝における往来関係記事と一支国』『魏志倭人伝の中の倭と韓－烏丸鮮卑東夷伝にみる東アジア  
交流－』令和元年度 東アジア国際シンポジウム 長崎県埋蔵文化財センター
- 久住猛雄2020『東西交流をめぐる基礎的認識と新地平－北部九州～日本海域の併行関係(予察)と板石硯－』『弥生時代の  
東西交流～広域的な連動性を考える～』考古学リーダー27 六一書房